

史跡 武田氏館跡 XIII

— 史跡武田氏館跡第1期整備事業(大手門周辺ゾーン)に伴う字三角・字高塙試掘調査報告書 —

2010

甲府市教育委員会

序

甲府盆地の北部に位置します躑躅ヶ崎の麓に築かれた国指定史跡武田氏館跡は、武田信虎・信玄・勝頼と戦国大名武田氏三代が居住した館として「躑躅ヶ崎館」の名で親しまれています。現在では館の中心部分に武田信玄をお祀りする武田神社が鎮座していることもあります。年間を通じて多くの来訪者で賑わっております。

本市では、貴重な歴史遺産であるとともに、戦国時代を学ぶ上で重要な史跡武田氏館跡を保護・保存し、将来に伝えるとともに、より多くの方にこの史跡を理解いただくことを目的として、平成16年度に『史跡武田氏館跡整備基本構想・基本計画』を策定いたしました。整備予定地内を4期に分割して事業を推進する計画がありますが、第1期整備事業に位置づけられております大手門周辺ゾーンから発掘調査成果をもとに整備を進めているところでございます。

本書に収録しましたのは、大手門周辺ゾーンのうち、躑躅ヶ崎の麓に広がる字三角・字高塙と呼ばれる最も東側の区域の試掘調査成果であります。部分的な確認ではありましたが、小さく段々に造成された区画の中に屋敷が営まれた痕跡が確認されるとともに、上器や陶磁器、土人形など戦国時代の人々が使用した道具が多数出土いたしました。中でも溶けた金属が付着した土器皿が多数の出土したことは、鍛冶職人が居住する城下町が広がっていたことを裏付ける資料として注目されます。

本書は、本市の新たな歴史を語る上で不可欠な発掘調査による学術成果を広く活用いただくことを目的に刊行しておりますが、今後の史跡整備や歴史教育の場など多方面でご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりますが、このたびの発掘調査にあたりご指導、ご協力を賜りました文化庁、山梨県教育委員会ならびに地元自治会の皆様をはじめといいます関係各位に厚く御礼申し上げますとともに、史跡武田氏館跡の整備事業につきまして、ますますのご理解とご助力を賜りますよう、お願ひ申し上げます。

平成22年3月

甲府市教育委員会

教育長 奥 田 理

例　　言

1. 本書は、山梨県甲府市古府中町・屋形一丁目・大手三丁目地内に所在する国指定史跡武田氏館跡における字三角・字高塙の試掘調査報告書である。
2. 本調査は、史跡環境整備事業に伴う発掘調査であり、甲府市教育委員会が主体となり実施した。
3. 本調査に係る経費は、国庫補助金ならびに山梨県費補助金の交付を受けている。
4. 本調査は、史跡武田氏館跡保存整備委員会の指導の下、佐々木満（文化振興課文化財主事）が担当した。
5. 発掘調査の期間及び面積は以下の通りである。
期　間：平成18年10月16日～平成19年3月30日
面　積：字三角 約440m²　字高塙 約140m²　合計580m²
6. 本書の執筆は佐々木満が行い、遺物の実測作業は栗田かず子・分部綾子が行い、遺構図トレイス及び図版作成、遺物トレイス及び図版作成を株式会社シン技術コンサルに委託した。
7. 史跡整備地全体の国土座標測量は、（株）昭和測量に委託しており、発掘調査区内の国土座標測量及び空中写真測量等は、（株）シン技術コンサルに委託した。
8. 出土品の保存処理業務については、（財）山梨文化財研究所に委託した。
9. 炭化材・金属製品の自然科学分析については、（株）パレオ・ラボに委託した。
10. 本書の編集は、小林純一（文化振興課長）を責任者とし、佐々木満が行った。
11. 本書に係る出土遺物及び記録図面、写真などは甲府市教育委員会で保管している。
12. 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、次の機関及び諸氏からご指導・ご教示・ご協力を賜った。記して厚く感謝申し上げる。（敬称省略）
文化庁記念物課・山梨県教育委員会学術文化財課・（財）山梨文化財研究所・
（株）丸光建設・山梨県立博物館・数野雅彦・杏名貴彦・畠 大介
13. 発掘調査参加者

赤沢 雅之	雨宮 小春	雨宮 英郎	池谷富士子	岡 悅子	金子 春枝
金井いく代	倉田 勝子	岸本 美苗	工藤 忠誠	小池 幸男	小池 幹子
小宮 通子	坂木しのぶ	佐田 金子	佐藤美喜男	木木 千並	高橋 主税
長沢 晴雄	長澤 由人	花曲 敬子	早川みどり	波木井祥和	平沢 則子
古屋袈裟男	保坂 秋蘭	保坂 哲	望月 宏美	望月貴美子	渡辺百合子
分部 綾子					

調査組織

事務局（平成21年度）

甲府市教育委員会文化振興課

文化振興課長 小林純一（事務職員）

文化財係長 萩原寛二（事務職員）・望月祐仁（事務職員：文化財主事）

主任 伊藤正幸・志村憲一・伊藤正彦・平塚洋一・佐々木満（事務職員：文化財主事）

嘱託 林陽一郎・中村里恵・三神千佳

史跡武田氏館跡保存整備委員会

委員長 萩原三雄（財団法人 山梨文化財研究所所長）

副委員長 山本光信（相川地区自治区連合会会長）

委 員 消雲俊元（山梨郷土研究会理事長）

小野正敏（大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館教授）

笛本正治（国立大学法人信州大学教授）

鈴木 誠（東京農業大学教授）

伊藤裕久（東京理科大学教授）

土橋勝夫（宗教法人武田神社代表役員宮司）

谷川義孝（甲府市議会議員）

渡辺礼子（甲府市議会議員）

凡 例

1. 発掘調査の測量においては、日本測地系 X - 36850.00・Y - 5360.00を基軸として 5mグリッドを設定している。
2. 本書に掲載した地図は、平成14年要部修正50万分の1地方図（4）関東甲信越、平成3年度甲府市都市計画図2500分の1・10000分の1を用いた。
3. 遺構断面土層の色調及び遺物観察表中の色調は、『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 1997後期）に基づいている。
4. 遺構・遺物の実測図縮尺は、基本的にはトレンチ 1/60・1/50、土坑・溝跡 1/30、出土遺物 1/3 であるが、大型の遺構や陶磁器・石製品には例外もあるため、図中に示した各スケールを参照願いたい。
5. セクション図に表記されている水平線の数値は、海拔高度を表し、単位はmである。また、セクションポイント表記の E・W・S・N は、東西南北を表し、同じ遺構で複数の断面観察を行っているところは、アルファベットで表記している。
6. 遺物実測図で反転復元したものについては、実測部分と復元部分の間にスペースを設けているが、全体を反転復元したものについては、中央線部でスペースを設けて区別した。
7. 本書作成に際して引用・参考にした文献は、一括して本書第5章末尾に記載した。
8. 本書に使用した記号及びスクリーントーンは、以下のとおりである。

[] 熔融物

[] 漆

[] 須恵器

目 次

序

例 言・調査組織・凡 例

目 次

挿図・挿表目次

第 1 章 武田氏館跡の概要	1
第 1 節 立地環境	1
第 2 節 歴史背景	1
第 3 節 武田氏館跡の構造	1
第 2 章 調査の概要	5
第 1 節 調査に至る経緯	5
第 2 節 調査の目的	5
第 3 節 調査区とその周辺の概要	7
第 4 節 調査の方法	7
第 5 節 調査の経過	10
第 6 節 調査後の処置	10
第 3 章 遺構と遺物	11
第 1 節 字三角	11
第 2 節 字高塙	20
第 4 章 自然科学分析	36
第 1 節 史跡武田氏館跡人手岡辺から出土した炭化種実	36
第 2 節 史跡武田氏館跡人手岡辺出土上器に付着する金属の成分分析	39
第 5 章 考 察	47
第 1 節 字三角の様相	47
第 2 節 字高塙の様相	48
第 6 章 結 語	51
写真図版	53

付図：字三角調査区全体図

字高塙調査区全体図

図版・表目次

図1 史跡武田氏館跡及び関連史跡	
位置図	2
図2 武田氏館跡曲輪配置図	4
図3 史跡武田氏館跡年次別整備事業	
計画図	6
図4 字三角・字高塙の古地籍図及び	
古写真	8
図5 字三角・字高塙調査区位置図	8
図6 史跡武田氏館跡グリッド図	9
図7 字三角トレンチ5	13
図8 字三角トレンチ7	15
図9 字三角トレンチ9	16
図10 字三角トレンチ13	19
図11 字三角トレンチ16・17	21
図12 字高塙トレンチ1	23
図13 字高塙トレンチ2	24
図14 字高塙トレンチ3・4	25
図15 字高塙トレンチ5	27
図16 字高塙トレンチ5遺構断面図	28
図17 字三角出土遺物(1)	31
図18 字三角出土遺物(2)	32
図19 字三角出土遺物(3)	
字高塙出土遺物(1)	33
図20 字高塙出土遺物(2)	34
図21 字三角・字高塙出土金属製品	35
表1 出土遺物観察表	29

写真図版目次

武田氏館跡遠景・武田氏館跡近景	53
字一角俯瞰	54
字三角調査区全景	55
字高塙俯瞰・字高塙調査区全景	56
字一角調査前～トレンチ4・5全景	57
トレンチ4・5全景～トレンチ7全景	58
トレンチ8・9全景～トレンチ10全景	59
トレンチ10南側断面～トレンチ13東側	
Pit列	60
トレンチ14北壁断面～トレンチ17全景	61
字高塙調査前～トレンチ2惣堀跡西側	
断面	62
トレンチ3全景～トレンチ5南側全景	63
トレンチ5全景	64
出土遺物	65

※第4章・第5章の図表は各章、各接毎に付しており、省略する。

第1章 武田氏館跡の概要

第1節 立地環境

国史跡武田氏館跡は、甲府盆地北部の山梨県甲府市古府中町、屋形三丁目、大手三丁目地内に所在する（図1）。水ヶ森山地と甲府盆地との境界に位置する上積翠寺町の山塊を源流とする相川が形成した扇状地開析部の標高約350mの南向きの傾斜地上に武田氏館跡は占地している。三方を山に囲まれた相川扇状地の西側には相川、東側には藤川が南流しており、両河川の造り出した深い谷を活かした天然の要害とみることも可能である。

相川扇状地東縁に連なる竜華の峰南端部は、尾根が半島状に突出しており、かつてはツツジが多かったことから「躑躅ヶ崎」、あるいは「花岡山」と呼ばれてきた。そのため、尾根の麓に築かれた武田氏館は一般に「躑躅ヶ崎館」の呼称で親しまれている。

武田信虎は、武田氏館造営の翌年（1520）には館の北に位置する積翠寺丸山（要害山）に城を築いている。さらに大永3年（1523）には扇状地南西端の尾根上に湯村山城を築城するとともに、その翌年（1524）には扇状地南東端の独立丘である一条小山に砦（現甲府城跡）を築いており（図1）、相川扇状地の三方を囲む山塊の頂部とその両端を結ぶ城砦網を整備した。地形的な要因による必然とも言えるが、城砦網が形成する三角形の中央に武田氏館が立地するよう当初から設計されていた可能性もあり、相川扇状地はまさに防衛に適した場所であった。

第2節 歴史背景

室町後期の甲斐国は混沌とした状況が続き、国人領主肩の台頭によって守護の基盤も不安定であった。若干14歳で甲斐守護武田家の家督を継いだ信虎（信直）の周囲には、近隣の親族衆とともに甲府盆地の北に今井氏、西に大井氏、南に穴山氏、富士北麓の郡内地域に小川田氏などが割拠し、虎視眈々と勢力拡大の機会を窺っていた。

しかし、信虎は対抗勢力を次々と屈服させて甲斐国統一を推し進め、永正16年（1519）には石和の川田館（現甲府市川田町）から天然の要害を形成していた相川扇状地開析部の躑躅ヶ崎の地に新たな居館を築いた。現在は主郭の周囲に複数の曲輪群が展開しているが、信虎が甲斐守護の館として築いた初期の武田氏館は、短期間で移転を終えていることを考慮すると、単郭の方形館である主郭のみであったと推測され、発掘調査の結果、主郭の規模も現在よりも小さな館であったことが明らかになっている。

武田氏館は、天正9年（1581）の武田勝頼による新府城移転まで約62年間、戦國大名武田氏三代（信虎・信玄・勝頼）の本拠となり、武田氏の領国統治の拠点として機能した。天正10年（1582）織田氏・徳川氏の連合軍による侵攻を受けて武田勝頼は田代で自刃し、名門武田家は滅亡した。

論功行賞の結果、甲斐国の多くは河尻秀隆に与えられたが、本能寺の変で織田信長が倒れると、河尻秀隆は一揆によって討たれ、空白となった甲斐国は、小田原北条氏との争奪戦の末、徳川家康への帰属が決まった。家康は、平岩親吉を入れて甲斐を守備させたが、その拠点は武田氏館跡が再利用されたと考えられる。徳川氏が関東に移されると、豊臣秀吉の家臣らが武田氏館跡に改修を加え、甲府城が完成するまで拠点としていたことが発掘調査成果等でも明らかにされている。

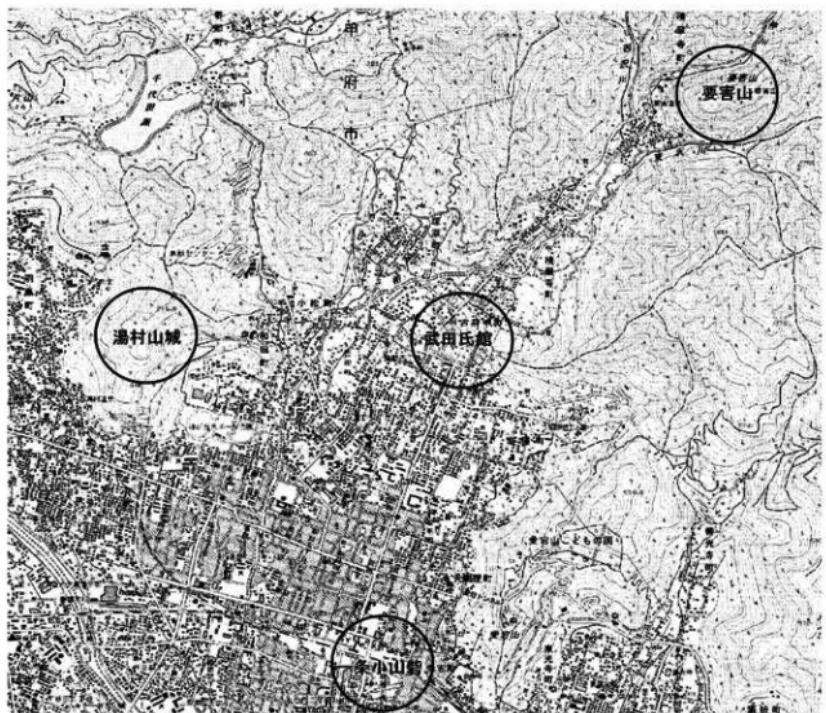
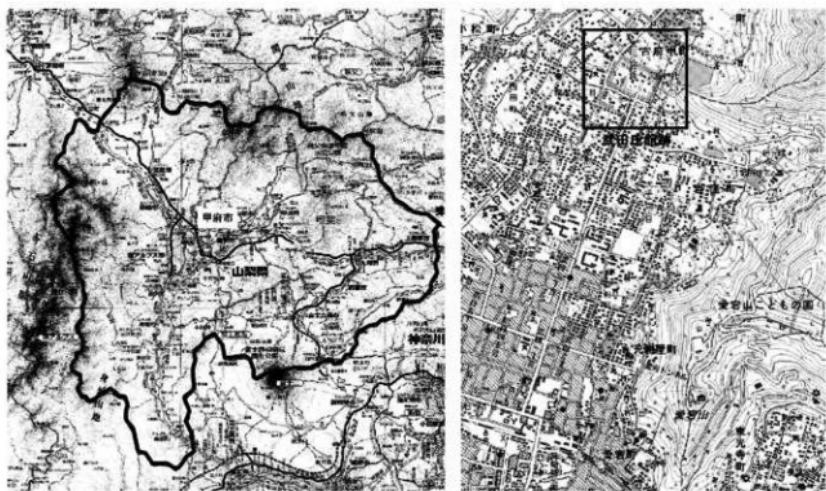


図1 史跡武田氏館跡及び関連史跡位置図

第3節 武田氏館跡の構造

武田氏館跡は、2町四方の方形単郭の主郭を中心として周囲に曲輪群が取り巻いている（図2）。武田氏の居所であった主郭には、現在甲府市街地から延びる県道（通称武田通り）に直結する形で通路が開かれているが、この通路は大正8年（1919）の武田神社造営時に参道として新設されたものであり、戦国期の虎口は東・西・北の三方に設けられていた。中でも東側に位置する虎口が館の正門にあたる大手と言われており、大手虎口東側の発掘調査によって丸馬出などが検出されている（甲府市教育委員会2009）。

『高白斎記』の記述にみられる武田信虎による新館の造営は、永正16年（1519）8月15日に鍼立を行い、12月20日に移転している。甲斐を統一したばかりの信虎の動員力と約4ヶ月という期間などを考慮すると、初期の姿は方形単郭の主郭のみであったと考えられる。実際に近年の発掘調査の結果、主郭の南土塁の中から現状規模より一回り小さな主郭の堀跡と土塁跡が検出され、大手においても古い時期の石積みが施された大手土橋と堀跡が検出されたことからも、初期の主郭が小さかったことが裏付けられつつある。

その後、天文年間の2度の火災を経て徐々に武田氏館の整備が進み、天文20年（1551）には武田義信の婚儀に伴い西曲輪が新造された。西曲輪の北には味噌曲輪、主郭北側には稻荷曲輪、無名曲輪、御隱居曲輪が連続して存在していることを考慮すると、武田信玄による領国拡大に伴い付属曲輪群も含めた館の拡充が進んだものとみられる。

主郭内部は、これまでの発掘調査によって武田神社創建時に大きな改変を受けたことが明らかになっているが、それまでは大きく三段の平場が形成され、武田期には庭園が南側に築庭されていたことも明らかになっている。武田氏滅亡後には大規模な改修を受け、野面積みの石垣で築かれた石垣などによって主郭内の空間は細分化されるとともに、北西隅に天守台が築かれるなど、織豊系大名による城郭化が進んだとみられる。

また、武田氏館跡南側には梅翁曲輪が造営されているが、江戸初期に成立したとみられる恵林寺蔵「甲州占城勝頼以前図」をみると、梅翁曲輪は徳川家康の家臣平岩親吉が築いたと記載されている。梅翁曲輪の名前の由来となっている梅翁についても、豊臣秀吉の家臣加藤光泰の家老であった井上梅雲斎に由来するとした説もある。いずれも徳川氏・豊臣氏の関与が窺われることから、現時点では武田氏滅亡後に築かれた曲輪であるとの見方が強い。

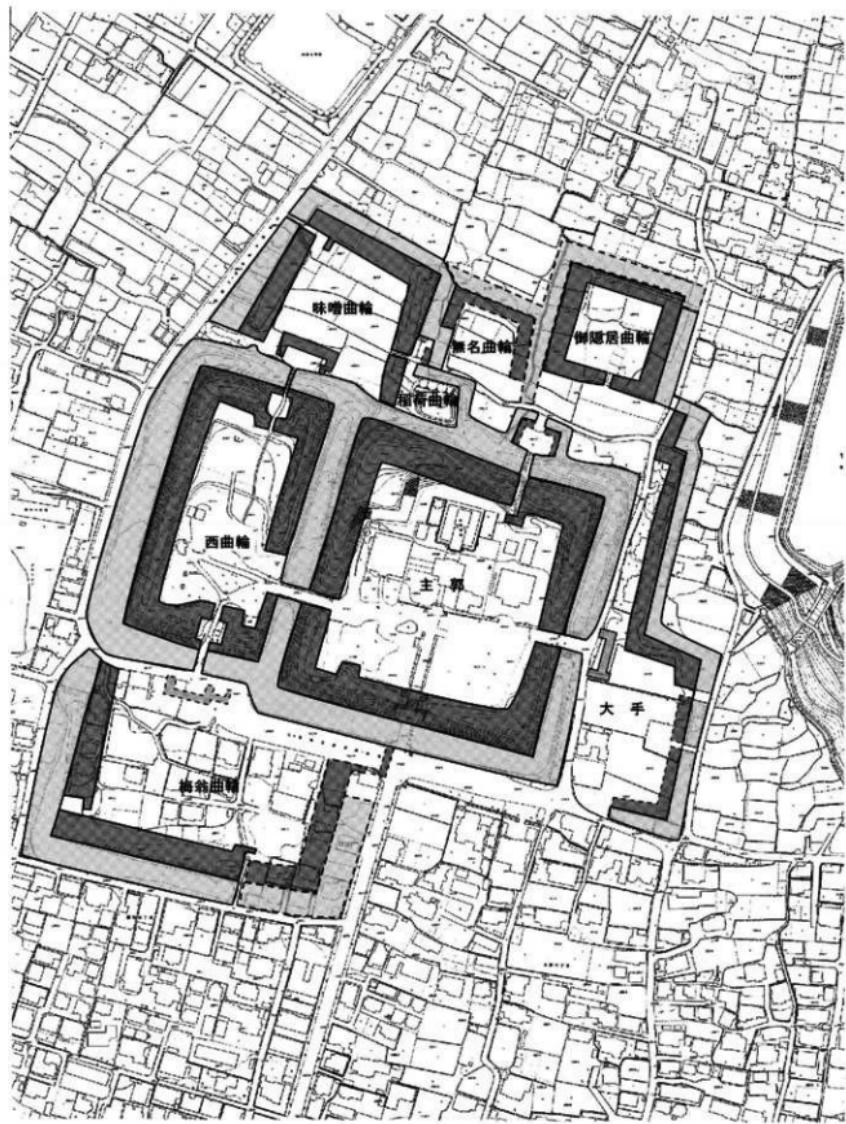


図2 武田氏館跡曲輪配置図

第2章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

武田氏館跡は、昭和13年（1938）年5月30日付で国史跡に指定され、面積は武田神社境内地及びその周辺一帯で約17万m²に及ぶ。昭和30年代後半以降急速に宅地化が進む中、平成6年（1994）10月には糸余曲折を経て地元合意の下で『史跡武田氏館跡保存管理計画』を策定し、史跡指定地内の取り扱いについて管理基準を定め、史跡の保護と整備へ向けた取り組みを開始した。

『史跡武田氏館跡保存管理計画』の策定を受けて甲府市教育委員会では史跡の整備や活用を検討するため、平成7年7月に学識経験者と地元代表、行政が参画した「史跡武田氏館跡整備活用委員会」を組織し、整備基本構想と整備基本計画の策定に向けた作業に着手した。平成7年度から平成14年度にかけて史跡整備を進める上での判断材料を得るために武田氏館跡の主たる曲輪群を対象として、曲輪の構造と変遷、範囲や遺構残存状況の確認を目的とした試掘調査を実施してきた。

その成果を基に平成15年度から整備内容などの検討を行い、平成16年度には『史跡武田氏館跡整備基本構想・整備基本計画』（以下では、「基本構想・基本計画」という。）を策定し、整備事業を推進することとした。策定に至る過程において、武田氏館跡全体の整備範囲や手順について検討がなされ、全体を大きく4つの区域に分割し、武田氏館が築かれてちょうど500年の節目を迎える平成31年（2019）を目指して事業を展開することとした（図3）。整備順序については、武田神社が創建された際に開削された南側の参道を多くの来訪者が武田氏館の正門と誤解している現状を勘案し、戦国期の武田氏館の正門にあたる大手空間の復元を目的として、大手門周辺ゾーンが第1期整備事業として位置づけられた。翌年には新たに学識経験者を主体とした「史跡武田氏館跡保存整備委員会」を設置し、発掘調査や設計内容の検討など細部に及ぶ協議の上に事業を展開している。

字三角・字高塙の発掘調査に関わる法令等の手続きに関しては、平成17年11月7日付け教発第1287号で文化財保護法に基づく史跡名勝天然記念物の現状変更許可申請書を文化庁長官に提出し、平成17年12月19日付け17府第4の1360号で許可を受けていた。

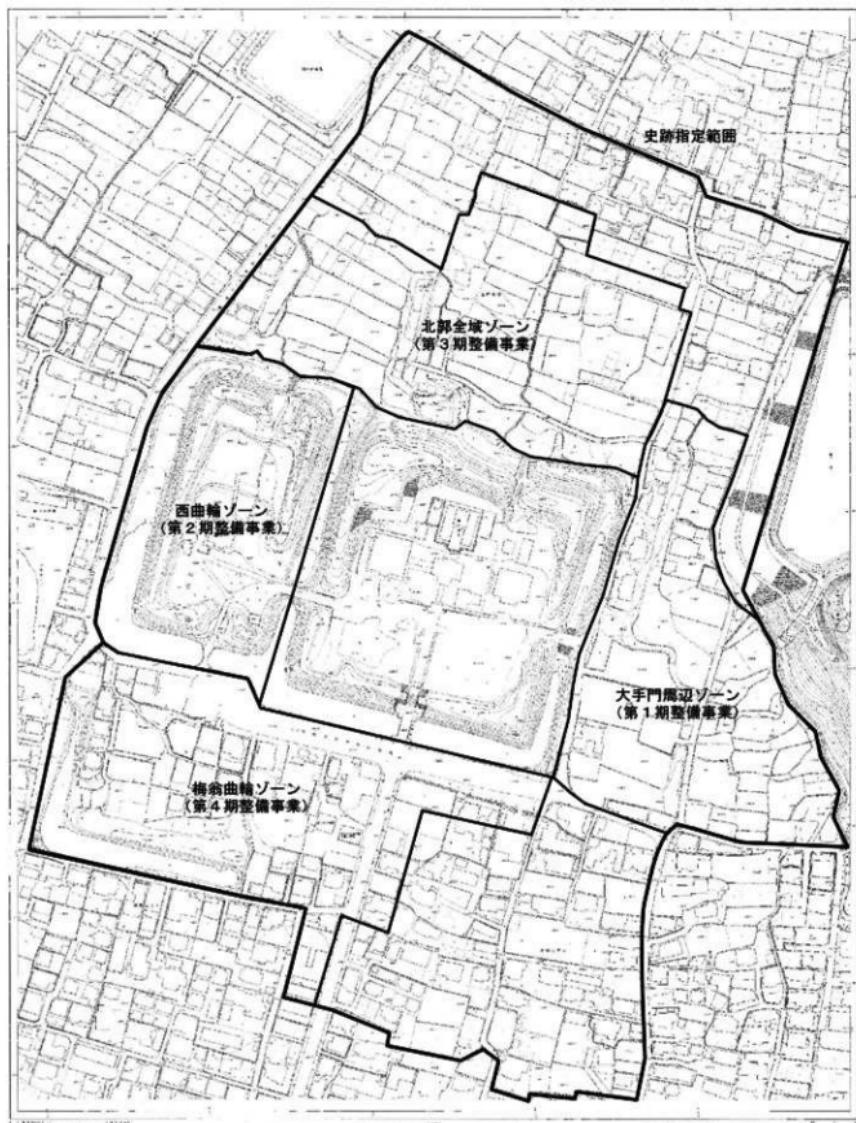
しかし、結果的には平成17年度段階では大手三日月塙の発見などを受け、大手東側周辺の調査を優先的に実施したため、字三角・字高塙の発掘調査は、翌年度の平成18年10月3日から着手している。調査順序は惣堀北側の字高塙から開始し、続いて字三角の調査を実施している。その後、平成19年3月30日までに埋め戻しを含めて作業を終了している。

第2節 調査の目的

基本構想・基本計画に基づき、第1期整備事業に位置づけられた大手門周辺ゾーンのうち、大手正面に位置する馬出から惣堀にかけての一帯が直近の整備工事範囲として検討され、発掘調査も重点的に行われた。その結果、大手門周辺ゾーンの空間構成は、大手門正面の馬出空間を包括するように惣堀と土塁によって一つの曲輪とも言える外郭を形成していたことが判明した。

しかし、惣堀内側の様相が明らかにされるに至ったが、さらにその外側の様相を把握する必要が生じた。特に惣堀の外側を南北に貫く戦国期の古道の一つである甲府市道鍛冶小路線から躰闘ヶ崎の麓にかけて広がる字三角・字高塙と呼ばれる一帯は、武田氏館跡に関する文献や古絵図にも記録がなく、用途も含めた遺跡の詳細は明らかにされていなかった。

よって、惣堀による大手東側の外郭線の外側に位置する字三角・字高塙地区の地下遺構の残存状況の把握や土地利用状況、場の性格を把握することを目的として試掘調査を実施することとした。



※事業計画の見直しによって、
西曲輪ゾーンを第2期整備とし、
北郭ゾーンを第3期整備に
変更している。

図3 史跡武田氏館跡年次別整備事業計画図

第3節 調査区とその周辺の概要

基本構想・基本計画の中で第1期整備に位置づけられた大手門周辺については、惣堀と土塁によって区画された外郭とも言える曲輪状の区画と、惣堀から躑躅ヶ崎の山裾一帯に広がる字三角・字高堀地区に大別される。

字三角は、大手東側の惣堀から市道鍛冶小路線を挟んですぐ東側に位置し、その範囲は躑躅ヶ崎の山麓を南流する藤川と市道鍛冶小路線によって区画された南向きの緩斜面地であり、道路と河川によって仕切られた文字通り三角形の地形を呈している。公有地化以前は扇状地の地形を利用した棚田状の小区画の水田が多くを占めており、水田の間を細長い畦道が縱横に走っていた。

字高堀については、館跡の東側一帯に残る惣堀土塁に字名は由来すると思われ、大手正面一帯から北側の御隱居曲輪周辺までの広範囲が範囲として含まれる。その中で本調査地点は、大手東側の惣堀北側で躑躅ヶ崎の先端を利用して昭和初期に築堤された竜ヶ池の堤下に位置し、字三角同様小規模な段状の区画が展開しており、以前は畑や水田として利用されていた（図4）。

土地利用の概況をみるとかぎり、字三角・字高堀とともに雛段状の小規模な区画が展開する地域であり、隣接する地区も含めて類似した土地利用の形態を有する。その点に関しては、字三角南側に隣接し、同形態の小規模な区画が展開する字鍛冶小路地区では、発掘調査によって熔融物付着土器が多数出土するなど鍛冶人が居住した城下町域と推定されている。

第4節 調査の方法

旧地形の把握を目的として、字三角では棚田状の小さな区画を網羅するように対象地全体を縦断する南北方向のトレンチを設定するとともに、東西方向へも横断するトレンチを設定し、全体を十字のトレンチで調査した。加えて、一部遺構の範囲確認を目的として2箇所にトレンチを設けて調査を実施し、全体で調査区番号を17まで付した。字高堀についても、大きな上下2区画の造成地内の中で調査区番号を5まで付した。

トレンチ幅は基本的に2mで設定したが、字高堀のうち古府中町3610-1地点に設定したトレンチ5については、調査成果の中間報告を史跡武田氏館跡保存整備委員会で検討した結果、調査区を拡大して面的な調査をする必要があると判断され、調査手法を切り替えた（図5）。

掘削作業は、基本的に人力による掘削を行っているが、字高堀については、公有地化以前に宅地造成が行われていた箇所もあり、人力での掘削が困難であったことから重機を使用している。字三角は棚田状の水田として利用されていたため、旧耕土等除去後、遺構面の確認作業を行っているが、各地点とも概ねその段階で包含層及び遺構を検出している。

個々の遺構等の調査方法は、史跡整備に必要な情報を得るために必要最小限の調査に止めることを目標としたため、基本的には全掘を避けて半蔵あるいは平面形を確認するだけに止めている。柱穴・土坑などの小遺構は、半蔵した上で遺構であるか判断し、写真・断面図・横断図などにより記録し、溝跡など大規模な遺構については部分的に観察面を設け、写真・断面図・横断図により記録した。その後、個々の調査がある程度完了したところで、空中写真測量により調査区全体を写真撮影し、固定化した。

武田氏館跡の調査記録に関しては、整備対象地域を対象として日本測地系による座標に合わせた方眼測量によって50m×50mの大グリッドを設定しており、東西列を算用数字、南北列をアルファベットで表記したものを組み合わせてグリッド番号として用いている（図6）。さらに大グリッド内を5m×5mの小グリッドに細分化し、北東隅から1～100までの算用数字を順に付すことによって区分している。各グリッド番号は、北東隅にあたる座標杭を基準としており、遺構実測、遺物の取り上げ等は、すべて大グリッドと小グリッドの組み合わせで記録した。



図4 字三角・字高塙古地籍図及び古写真

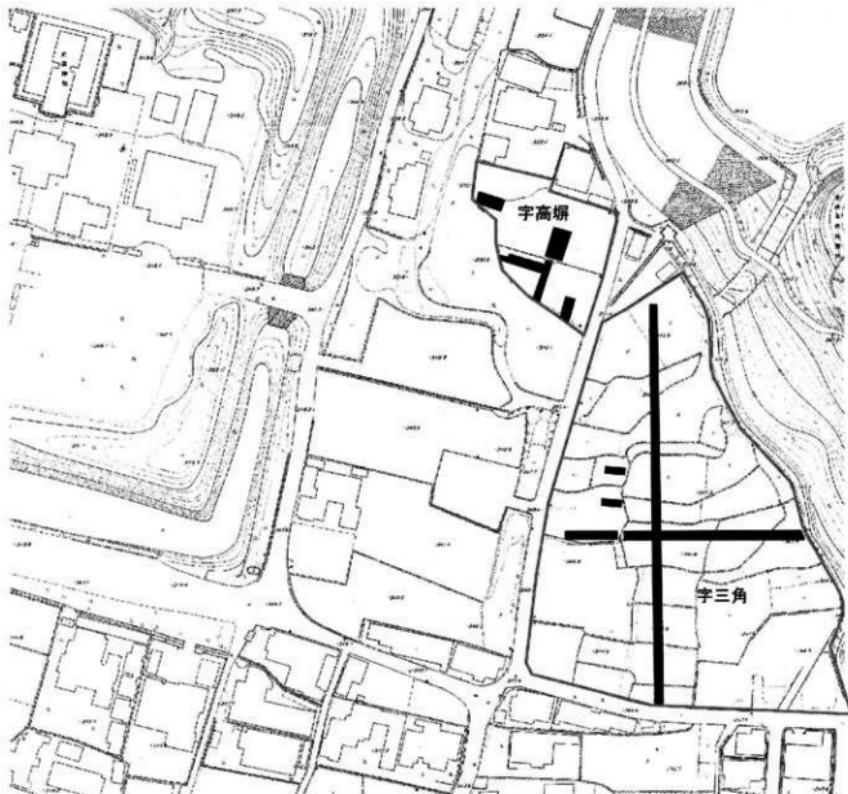


図5 字三角・字高塙調査区位置図

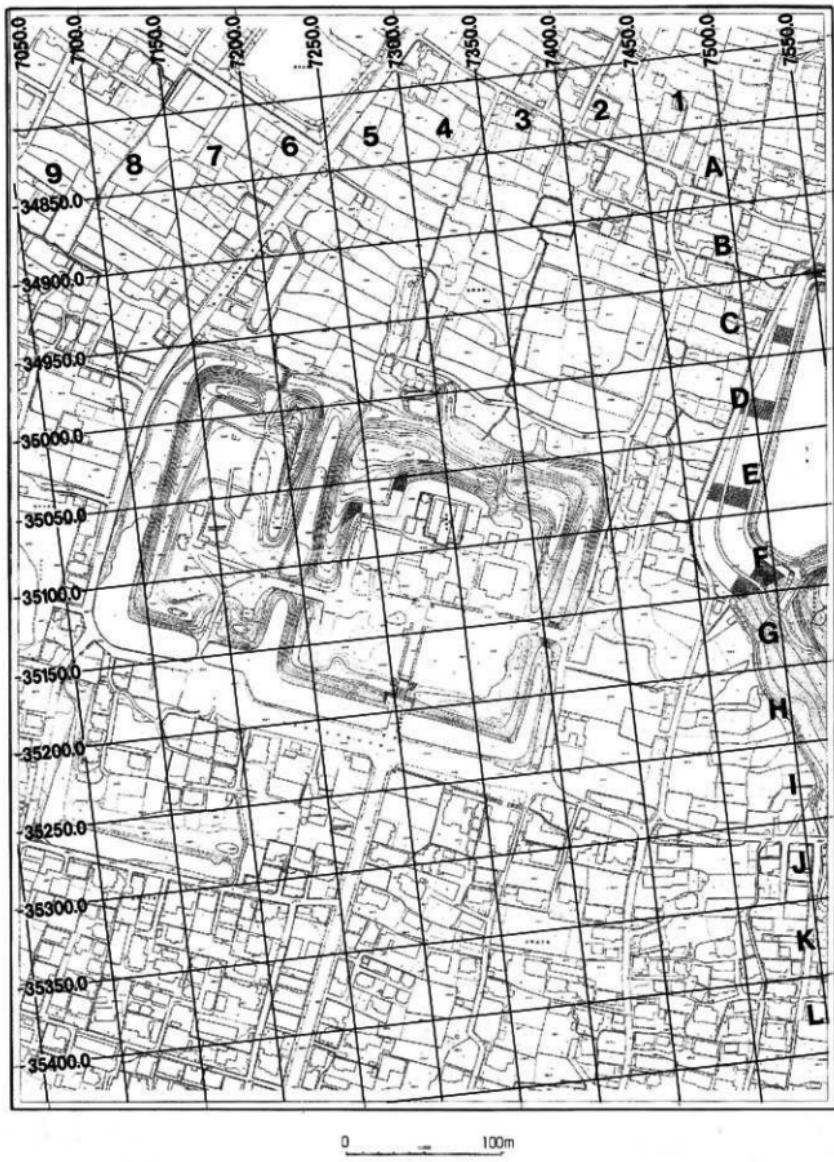


図6 史跡武田氏館跡グリッド図

第5節 調査の経過

字三角・高堀の発掘調査は、大手三日月堀周辺の追加調査及び、大手南側の試掘調査、主郭西虎口右積み解体修理に伴う調査と併行して実施しているため、断続的に行っている。発掘調査順序は、字高堀から着手し、次いで字一角を実施している。両地点は各トレンチの進捗状況を踏まえた上で順次進めており、以下では主要な調査状況について概況を整理する。

- 10月16日 字高堀調査区設定。重機により掘削。
10月17日 トレンチ全体精査、掘削。トレンチ1・2の畠跡跡掘削。
10月25日 畠跡跡を完掘し、中世遺構確認。トレンチ5において土坑等確認。
10月27日 字三角調査区設定。
10月30日 字三角調査開始。人力によりトレンチ1から掘削。
11月1日 重機により字三角東西トレンチ掘削。
11月2日 基準点測量着手。
11月7日 調査用方眼測量杭設置。8日終了。
11月13日 字一角トレンチ5において1号溝跡確認。
12月4日 字高堀調査再開。
12月18日 字高堀において惣堀の範囲確認のためのトレンチ4を掘削。
1月15日 12月21日に開催された史跡武田氏館跡保存整備委員会第5回専門委員会において、字高堀の場の性格を把握するために調査範囲を拡張するよう指導を受け、トレンチ5を拡張した。
1月18日 字三角において、道路遺構の確認のためトレンチ17を新設し、掘削に着手。
1月23日 字一角の空中写真測量実施。
2月2日 字三角全体の最終精査。トレンチ5において連続した4基の土坑を確認。
2月6日 バレオ・ラボによる科学分析試料採取。
2月7日 字三角南側のトレンチにおいて、サブトレンチによる断ち割りを実施し、地形造成状況の確認。
2月26日 字高堀のトレンチ1・2・5内で確認された溝跡・Pit等の半蔵等部分調査着手。
3月1日 字三角トレンチ14西側の北壁に設定したサブトレンチから炭化米などが多数出土。
3月4日 現地見学会開催。参加者318名。
3月9日 字三角トレンチ5のうち、連続した4基の土坑東側を拡張して調査。
3月14日 すべての調査を完了。埋め戻しのための養生処置を行う。
3月15日 字高堀埋め戻し開始。
3月23日 字三角埋め戻し開始。
3月30日 養生処置を施し、平成18年度調査終了。

第6節 調査後の処置

発掘調査後は、山砂を土体とする混合土を遺構面及び掘削箇所に5cm前後の厚さで敷設し、重機と人力によって埋め戻しを行っている。また、惣堀跡の護岸石垣周辺などには、部分的に山砂を詰めた土のうを設置して埋め戻しを行った。

発掘調査によって記録された図面や写真、出土遺物については、甲府市山宮甲文館において整理作業を実施した。遺構図は一部のトレース、図版作成を委託によってを行い、出土遺物は洗浄、注記、接合、実測までを甲府市教育委員会で行い、トレース、写真撮影、図版作成等を委託して本書の刊行に至っている。

第3章 遺構と遺物

史跡整備事業に伴う保護・保存を前提とした発掘調査であるため、字三角・字高塙の基本的に調査方法は、表面観察による遺構平面形の確認を中心としており、遺構番号については、トレンチ毎に1から順に番号を付している。個々の遺構の調査に関しては、規模や性格の判別など必要に応じて半蔵など部分的な掘削を行った。

遺物についても、遺構確認面上層に堆積していた表土や盛土層内の遺物や掘削中にやむを得ず原位置を失ったもの、あるいは小破片に関しては、トレンチ毎に一括して取り上げているが、それ以外については位置と高さを記録した上で取り上げを行っている。

第1節 字三角

トレンチ番号は、各区画の段差毎に付しており、南北方向で1~11まで、東西方向で12~17までを設定した。調査対象は全体が公有地化以前に水田として利用されてきたため、各トレンチの基本層序は、現地表から約0.3~0.4mまで水田耕作土と床土が堆積していた。

トレンチ1 (遺構:全体図中 遺物:図17)

位置: G 1 - 47~87グリッド付近

調査状況: 南北方向に設定したトレンチの規模は、長さ約22.5m、幅約2.0mである。水田床土除去後すぐに中世と考えられる遺構確認面が検出された。遺構確認面の検出状況は、G 1 - 67-68グリッドラインより北側では地山が検出され、明確な遺構は確認されなかったが、それ以南では土坑やPitなどが確認された。

検出遺構: 個々の遺構の掘削は実施しなかったが、確認した範囲で溝跡1条、上坑2基、Pit 1基が確認された。しかし、1号溝跡については、覆土の状況から水田に伴う溝跡と考えられる。

出土遺物: 1は瓦質の三脚付香炉である。肩部に刻印があり、底部から底部にかけて膨らむ形態であり、これまでの武田氏館跡の調査の中でも出土例がない。2は16世紀後半のかわらけ、3は火鉢口縁部であり、押印が施されている。

トレンチ2 (遺構:全体図中 遺物:図17・21)

位置: H 1 - 8~18グリッド

調査状況: やや変形した区画に合わせて設定したトレンチの規模は、西側が約9.5m、東側が約5.5mであり、幅は約2.0mである。遺構確認面の検出状況は、全体的に焼土や炭化物が散乱した状況であり、調査は北側では地山面も確認された。

検出遺構: 溝状遺構1条、土坑1基、Pit 1基が確認されたが、個々の遺構の掘削は実施しなかった。中でも1号土坑では炭化物と灰が集中的に確認されたことから、かや窯など火を扱った遺構であった可能性が高い。関連した状況として、調査は南側にはかや窯の廃棄物か、あるいは火災後の堆積と考えられる焼土や炭化物層が堆積しており、その状況は、接続するトレンチ3北端まで続くことが確認された。

出土遺物: 4~8まではかわらけ、9は瀬戸美濃灰釉皿、10は青花皿である。5のかわらけは16世紀後半のものと考えられるが、内面に熔融物が付着している。熔融物付着土器は、このトレンチだけでも固化したもの以外に12点出土した。他にも110の六角形の銅製品や固化できなかつたが、小さく磨耗した砥石片なども出土している。

トレンチ3（遺構：全体図中 遺物：図17）

位置：II 1 - 18~38グリッド

調査状況：トレンチ2から続くやや変形した区画に合わせて設定したトレンチの規模は、西側が約8.3m、東側が約12.0mであり、幅は約2.0mである。

遺構確認面の状況は、前述のとおり、北端部に焼土や炭化物を含む層の堆積が確認されており、区画の関連性が窺えた。また、G 1 - 67・68グリッドラインより北側では明確な遺構は確認されなかつたが、地山が検出されている。対照的にそれ以南では包含層も確認され、土坑やPitなどが確認された。

検出遺構：個々の遺構の掘削は実施しなかつたが、確認した範囲で溝跡3条、土坑2基、Pit 1基を確認した。最も北に位置する溝跡には焼土や炭化物が多量に含まれていたが、トレンチ2南側に広がっていた焼土や炭化物と関連があると考えられ、上段との境界に設けられた溝である可能性もある。ほかにトレンチ中央付近から礫群が検出されているが、遺構であるかはつきり断定できなかつた。

出土遺物：11～13はかわらけ、14は土器鉢、15～17は瀬戸美濃製品、18は青花皿であり、瀬戸美濃製品は大窯第1・2段階の遺物群である。

トレンチ4（遺構：全体図中 遺物：図17・21）

位置：H 1 - 48グリッド

調査状況：東西に細長い区画内のうち、南北トレンチの延長上で長さ約2.4m、幅約2.0mのグリッド状に掘削したが、狭い調査区内の遺構面からは多数の小礫が検出された。水田耕作によって上面は削平されたと考えられるが、小礫は比較的密に敷設されたような箇所も確認された。

検出遺構：明確な遺構は発見されなかつたが、小礫群は敷石状になっていたことから、道路跡である可能性もある。

出土遺物：19は瀬戸美濃端反皿であるが、漆接ぎがなされていた。他に105の釘が出土している。

トレンチ5（遺構：図7 遺物：図17・18）

位置：H 1 - 58~79グリッド付近

調査状況：トレンチの規模は、長さ約13.5m、幅約2.0mである。トレンチの状況は、中央付近で確認された2号溝跡を境に北側は礫混じりの地山層、南側は炭化物を含む包含層に分かれている。地山面が検出された北側では、直径0.6～0.7mの円形土坑が4基連続して確認されたことから、付随する遺構の有無を確認することを目的として遺構検出箇所の東側を2m四方で拡張してL字状の調査区とした。

検出遺構：確認した遺構は、溝跡2条、土坑5基、Pit 1基である。トレンチ南側では配石された1号溝跡によって区画された基壇状の区画とPit 1が確認されている。特に1号溝跡とその東側の基壇状の区画周辺には包含層が残されており、多数の遺物が出土した。1号溝跡は、サブトレンチによって確認したが、深さは約0.15mであった。

トレンチ中央では2号溝跡をサブトレンチによって掘削し、幅約0.7m、深さ0.3mであることを確認した。その北側に位置する4基連続した土坑は、紺屋が藍染などで用いた糞を埋設したものである可能性も想定されたため、1号土坑のみ半蔵して確認作業を行った。1号土坑は、直径0.8mの円形の平面形で、深さ約0.4mでU字状に掘り込まれており、全体に炭化物を含む暗褐色土に覆われていた。想定された埋糞の破片等の出土はなく、確認は得られなかつたが、土坑は炭化物を含む土で一度に埋め戻されていたことから、埋糞など埋設物が

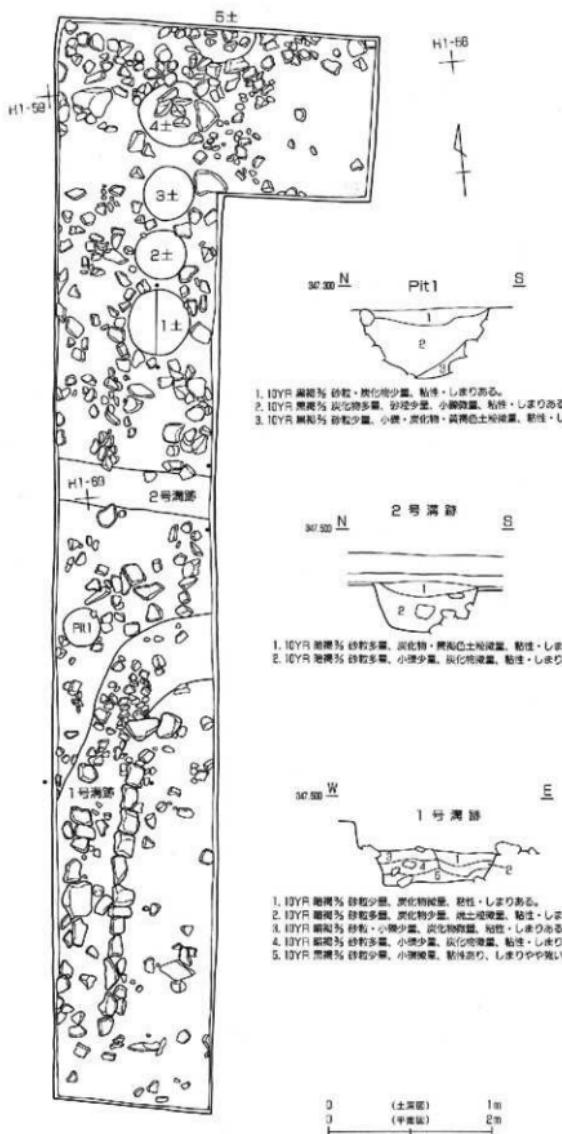


図7 字三角トレンチ5

抜き取られたものである可能性が高いと考えられた。

出土遺物：造構に伴うものは、20～25までは1号溝跡、26がPit1出土である。20～23はかわらけ小皿、23は火鉢、24は土人形、25は青花碗で小野編年C群である。そのほか、27～33も1号溝跡周辺から出土しており、いずれも同時期の遺物と考えられるが、27～29がかわらけ、30が大窯2段階の灰釉丸皿、31～33は白磁端反皿である。

トレンチ6（遺構：全体図中 遺物：図18）

位置：H1-79・88・89グリッド付近

調査状況：南北方向に設定したトレンチの規模は、長さ約5.5m、幅約2.0mである。小礫などが確認面で多数検出されたが、造構としてのまとまりや意図的な配置はみられず、明確な造構は確認されなかった。

検出造構：造構なし。

出土遺物：34～36はかわらけ、37は白磁端反皿の底部と考えられる。

トレンチ7（遺構：図8 遺物：図18・21）

位置：H1-99・I1-9・19グリッド付近

調査状況：東西方向に設定したトレンチと交わるトレンチであり、トレンチの規模は、長さ約13.0m、幅約2.0mである。造構確認面は、概ね地山面で確認されており、溝状造構や土坑、Pitなどが確認されている。特にI1-9グリッド付近が最も造構密度が高く、Pitの中には、掘立柱建物跡など構造物になる可能性が高いものも存在した。

検出造構：個々の造構の掘削は実施しなかったが、確認した範囲で溝状造構1条、土坑1基、Pit10基が確認された。

出土遺物：造構の検出量の割に実測可能なものは意外と少なく、掲載遺物も38の小型かわらけと39の白磁端反皿のほか、115の占錢（開元通寶）のみであった。

トレンチ8（遺構：全体図中 遺物：図18・21）

位置：I1-29・39グリッド付近

調査状況：トレンチ7とは現況で約0.9mの段差が生じている。トレンチの規模は、長さ約12.0m、幅約2.0mであり、検出状況は全体的に礫が多く、トレンチ北側に位置するI1-29グリッド内は礫が混じる地山であった。I1-39グリッド側も類似した状況であったが、礫の間から遺物が出土するなど、僅かながら包含層が残されていた。

土層観察のためにトレンチ西側をサブトレンチによって掘り下げたが、下層は地山と考えられる礫層に覆われており、掘削も困難な状態であった。

検出造構：明確な造構なし。

出土遺物：40～42はかわらけであり、うち41には熔融物が付着していた。43～45は大窯1段階の瀬戸美濃灰釉皿である。このほか、108は釘である。

トレンチ9（遺構：図9 遺物：図18・21）

位置：I1-49～69グリッド付近

調査状況：トレンチ8とは現況で約0.5mの段差が生じている。トレンチの規模は、長さ約11.5m、幅約2.0mである。トレンチ中央から北側は礫層に覆われ、南側は包含層と考えられる暗褐色上層が堆積しており、南端部には右列と小礫群が検出された。

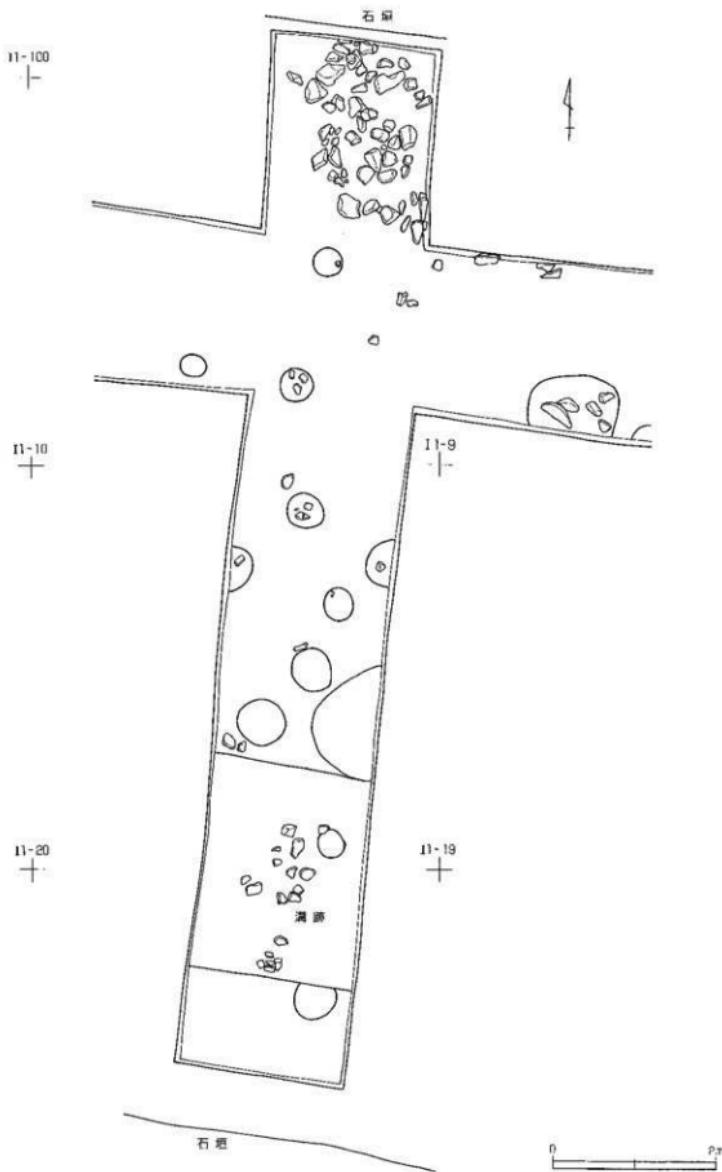


図8 字三角トレンチ7

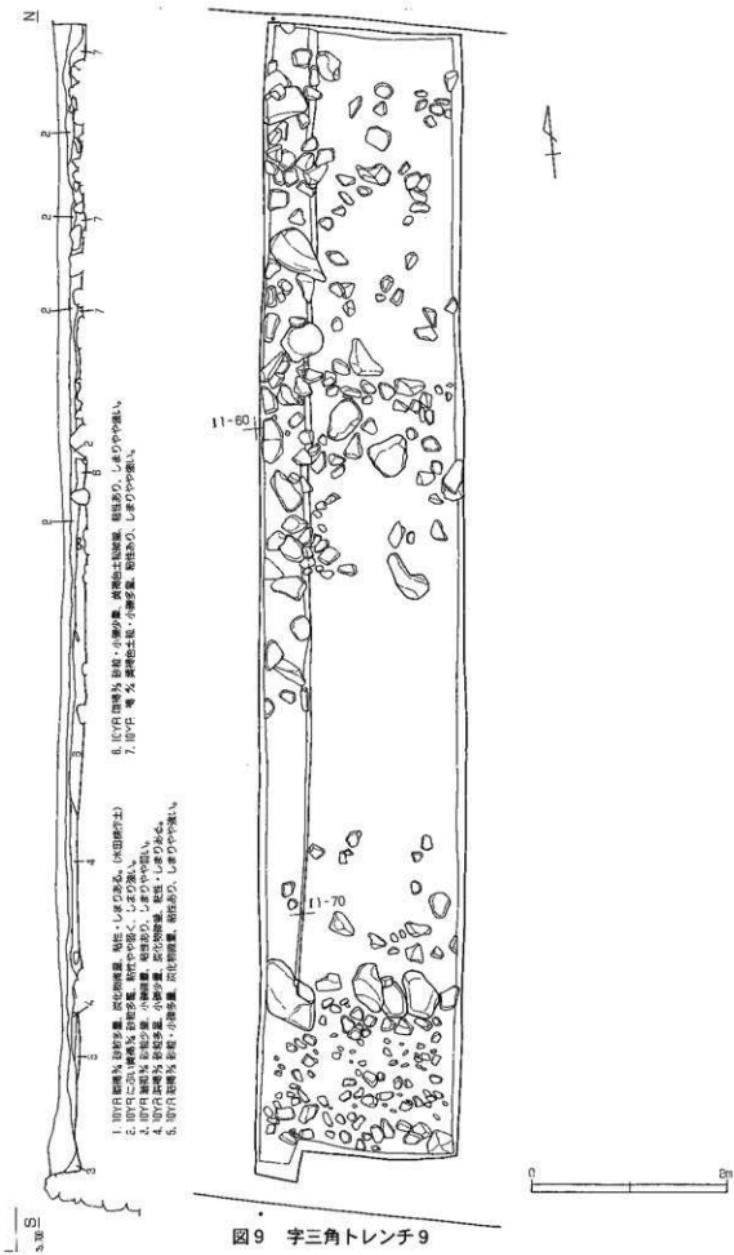


図9 字三角トレーンチ9

トレンチ西側をサブトレンチによって掘り下げたが、北側の礫層は地山と考えられ、掘削も困難な状態であった。南側については、盛土層が約0.6mまで確認された。

検出遺構：トレンチ南側で検出された石列は、不整形ながら東西方向に伸びており、石列からトレンチ南端までの間には小礫群が検出されている。検出状況から判断し、石列が敷地境界となり、小礫群が道路跡になるのではないかと考えられる。

出土遺物：46・47はかわらけ、48は火鉢、49・50は大窯1・2段階の瀬戸美濃灰釉皿、51は白磁端反皿である。116は古錢（紹聖元寶）である。

トレンチ10（遺構：全体図中 遺物：図18）

位置：I 1 - 80・90グリッド付近

調査状況：トレンチ9とは現況で約0.9mの段差が生じている。トレンチの規模は、長さ約12.0m、幅約2.0mである。トレンチ北側のうち、北端部から約3.0mまでは地山と考えられる礫層が露出し、それ以南は暗褐色層が確認された。暗褐色土層上では、溝跡が1条検出されたが、ほかに明確な遺構は検出されなかった。

トレンチ西側にサブトレンチを掘削して土層観察を行ったが、南側は予想以上に盛土層が厚く、現況の地形の原形が中世段階で造成されたものであることが確認された。

検出遺構：1号溝跡は掘削していないものの、長さ約8.4mであった。覆土の状況から水田跡に伴う溝と考えられ、中世よりは新しい遺構と考えられる。

出土遺物：掲載したものは、52の白磁端反皿である。

トレンチ11（遺構：全体図中 遺物：掲載なし）

位置：I 1 - 100・J 1 - グリッド付近

調査状況：南北トレンチの南端に設定されたトレンチであり、南接する道路面からは0.7m、トレンチ10との段差は約1.0m生じている。トレンチの規模は、長さ約6.0m、幅約2.0mである。

全体的に礫混じりの黒褐色土層が検出されたが、明確な遺構は確認されなかった。

検出遺構：明確な遺構なし。

出土遺物：微量の遺物が出土しているが、掲載遺物はない。

トレンチ12（遺構：全体図中 遺物：図18・19・21）

位置：H 1 - 91～94グリッド付近

調査状況：東西方に設定したトレンチのうち、西端の鍛冶小路側に位置しており、平成13年度には本トレンチ北側で遺構の有無を確認するための試掘調査を実施しており、溝跡やPitを検出していた。今回はその広がりと連続性を確認するために併行する位置にトレンチを設定しており、その規模は、長さ約15.0m、幅約2.0mとした。南北トレンチ同様に現地表から約0.3mまで水田層があり、水田床土除去後すぐに中世と考えられる遺構確認面が検出された。

遺構確認面の状況は、暗褐色の包含層が堆積しており、当初は遺構確認ができなかつたが、地山近くになり、H 2 - 92・93グリッドで遺構が確認された。

検出遺構：個々の遺構の掘削は実施しなかったが、遺構面の精査によって土坑1基やPit 1基が確認された。

出土遺物：53・54はかわらけで、54は内面に熔融物が付着していた。55は内耳鏡、56は青花碗である。このほか、金属製品で106・107が釘、112の銅製品、114の古錢などが出土している。

トレンチ13（遺構：図10 遺物：なし）

位置：H 1 - 96~100グリッド付近

調査状況：南北トレンチ7と交わるように設定された東西方向で最も長いトレンチであり、規模は、長さ約27.5m、幅約2.0mである。トレンチ西側に位置するH 1 - 100、H 2 - 91グリッドでは水田層直下で礫が入り混じる地山が検出され、明確な遺構は確認されなかった。対照的にトレンチ7より東側では、僅かながら包含層が残存し、土坑や溝跡、Pitが多数確認された。

検出遺構：遺構の検出状況は、全体的に地山面で確認されており、トレンチ内ではPit17基、土坑3基、溝跡1条が検出されている。1.9m間隔で並んでいたPit 1 ~ 3を半截して確認したところ、深さは約0.4~0.5mであり、堆積上や深度も近似していたことから、掘立柱建物跡などの一部である可能性も想定された。その他、1号土坑を半截したが、非常に浅い掘り込みであり、遺構の性格などは不明であった。

出土遺物：かわらけなどが少量出土しているものの、掲載遺物はない。

トレンチ14（遺構：全体図中 遺物：図19・21）

位置：I 1 - 3 ~ 5グリッド付近

調査状況：トレンチ13の東に位置し、約0.4mの段差が生じている。トレンチ規模は、長さ約15.0m、幅約2.0mである。I 1 - 4 ~ 5グリッド一帯には褐色粘土層が広がっており、I 1 - 4の粘土層上で溝状遺構が確認された。

しかし、粘土層の性格を把握するため北壁にサブトレンチを掘削したところ、下層から火災の痕跡とみられる炭化物層が確認されたため、粘土層が火災層を覆う整地層であることが判明した。上面で溝状の平面形なども確認されているが、整地の土砂の一部である可能性も想定された。炭化物には肉眼観察で多量の炭化米が含まれていることが判明し、科学分析を行っているが、付近に存在した倉庫などが焼失した可能性も考えられる。

検出遺構：溝状遺構が1条確認されているものの、前述のとおり整地層の一部の可能性が高く、明確な遺構は確認されなかった。

出土遺物：57・58はかわらけで、うち58には熔融物が付着していた。59は瀬戸美濃鉄軸の小坏であった。ほかに104の鉄製品があるが、用途などは不明である。

トレンチ15（遺構：全体図中 遺物：図19）

位置：I 1 - 0 ~ 2グリッド付近

調査状況：東西トレンチの最も東に位置し、トレンチ14とは約0.6mの段差が生じている。トレンチ規模は、長さ約9.5m、幅約2.0mであり、東端は藤川脇の道に接する。

遺構確認面は、地山上で確認されているが、溝状遺構がトレンチ中央付近で数条確認されている。トレンチ東側では石列が確認されており、その付近には暗褐色土の包含層が残されていた。

検出遺構：南北方向の溝状遺構が4条確認されたが、礫が含まれる溝跡と含まれない溝跡に区別された。それぞれの重複関係なども判然としなかった。

その他、トレンチの東側には躑躅ヶ崎の麓を流れる藤川があり、現在では河川沿いに細い歩道が設けられている。歩道はトレンチよりも一段低い位置にあり、歩道とトレンチの境界には既存の石積みが存在するが、その裏側から現況地形に沿うように石列が検出された。石列は、溝跡などが検出されている遺構面上で検出されたもので、中世遺構と考えられ、敷地

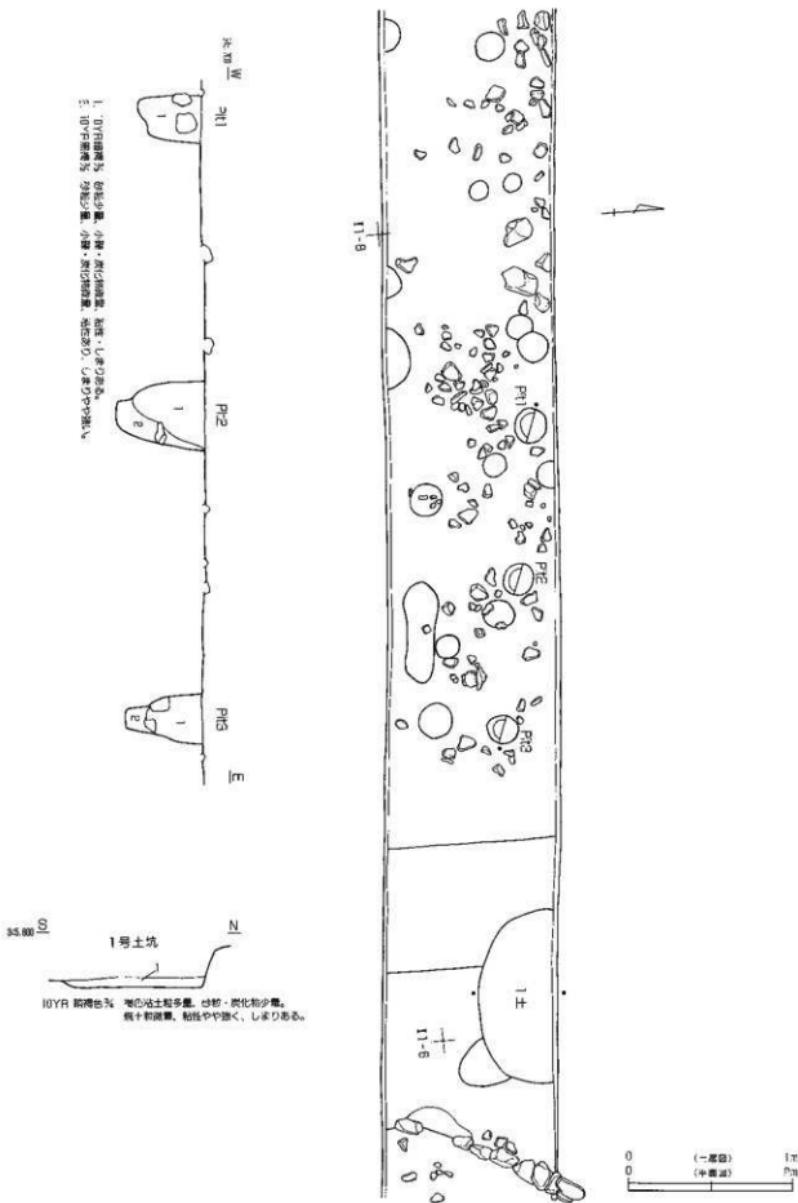


図10 字三角トレンチ13

を何らかの意図で区画する役割があったものと推測される。既設の歩道がいつ頃まで遡るものであるか定かではないものの、場合によっては、石列は道路との境界に設けられたば画施設であった可能性もある。

出土遺物：60は瀬戸美濃灰釉皿、61は五輪塔の水輪であり、溝跡上面から出土したが、意図的に掘えられていたものであるかは判断できなかった。

トレンチ16（遺構：図11 遺物：なし）

位置：H 1 - 60・H 2 - 51グリッド付近

調査状況：トレンチ5の西側で一段高い位置にあり、トレンチは鍛冶小路に接する区画の東端に長さ約5.0m、幅約2.0mの規模で設定した。

検出遺構：Pit 1基とH 2 - 51から61ライン上で石列が検出されている。合わせて石列東側から小礫群が検出されたが、状況的には南北トレンチ9南端部の状況に類似していた。石列から約1.8m東側は大きな地形の段差が生じているが、検出状況から判断すると、段差と石列の間が道路跡として利用された可能性が想定される。その際、石列は一つの敷地境界として意識されたと考えられ、土地の利用形態が近年まで使用されてきた水田の畦道と重複することから、戦国期の道路がそのまま継続的に使用されてきた可能性が高い。

出土遺物：かわらけなどが少量出土しているが、掲載遺物はない。

トレンチ17（遺構：図11 遺物：図21）

位置：H 2 - 71・72グリッド付近

調査状況：トレンチ規模は、長さ約5.0m、幅約2.0mであった。

検出遺構：トレンチ16同様にH 2 - 72グリッド内において小礫群が検出され、北壁際で石列の一部とみられる礫が1石検出された。位置的にはトレンチ16を南へ下った場所でもあり、東側の段差との間が道路として使用された可能性が高い。

出土遺物：かわらけなどが少量出土しているが、掲載遺物は、62は熔融物付着土器で、63は砾石、64は須恵器壺片であった。111の管状の銅製品のみである。

第2節 字高堀

大きく上2下2区画に造成されていた敷地に対して下段部で3箇所、上段部で2箇所のトレンチを設定した。下段については、惣堀の立ち上がりを捉えるためにL字型に設定し、東西方向をトレンチ1、南北方向をトレンチ2とした。さらにトレンチ1・2の東側に南北方向のトレンチ3を設定した。上段部でも惣堀の範囲確認のために堀に接する敷地西側で東西方向にトレンチ4を設定とともに、トレンチ2の軸線に合わせるように南北方向にトレンチ5を設定して調査した。

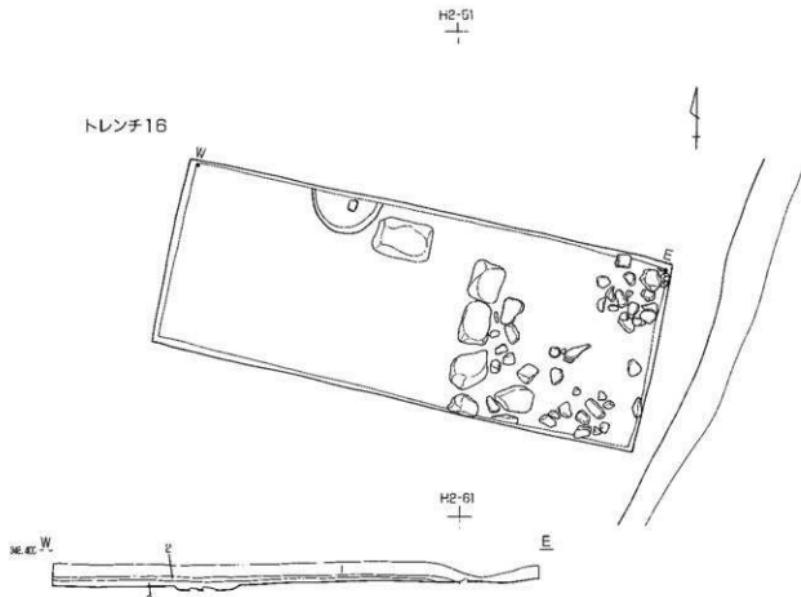
トレンチ1・2（遺構：図12・13 遺物：図19・20）

位置：G 2 - 15・16、G 2 - 23~25、G 2 - 34・44グリッド

調査状況：東西方向に設定したトレンチ1の規模は、トレンチ2との接続部から長さ約11.0m、幅約2.2mで調査したが、東側は惣堀までさらに長さ約3.0m、幅約1.0mの規模で延長した。南北方向に設定したトレンチ2の規模は、長さ約13.5m、幅約1.8mで設定したが、トレンチ1同様に惣堀の範囲確認のため、南側に長さ約3.0m、幅約1.0mで拡張している。

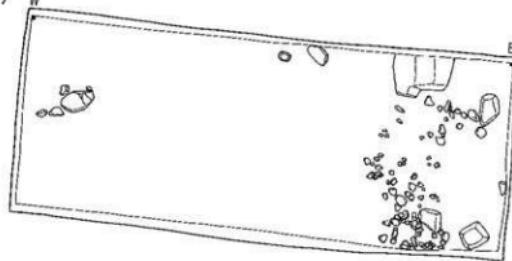
調査区の層序は、全体に約0.6mの盛土層があり、その下層から炭化物を多量に含む暗褐色土が全面で確認された。掘り下げたところで東西方向の溝跡が16条検出され、本格的な

トレンチ16



1. 10YR 5/6 砂粒多量、炭化物少量、粘性・しきりある。(水田耕作上)
2. 2.5Y 黑褐色 5% 砂粒多量、粘性やや薄く、しまり悪い。
3. 10YR 5/6 砂粒少量、小砾・炭化物・塊状鉄錆量、粘性あり、しまりやや強い。

トレンチ17



4. 10YR 5/6 砂粒少量、炭化物少量、粘性あり、しまりやや強い。
5. 10YR 5/6 砂粒多量、炭化物・塊状鉄錆量、粘性・しまりある。
6. 10YR 5/6 砂粒少量、小砾・粘性・しまりある。

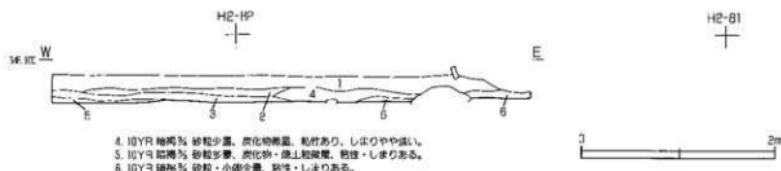


図11 字三角トレンチ16・17

調査はその段階で開始したが、この地点では水田跡は確認されていない。

検出遺構：盛土層除去後の上層において確認された16条の溝跡のほか、地山に近い下層から土坑5基、Pit 9基が確認されている。そのうち、上層で確認された16条の溝跡については、部分的に掘削し、土層堆積や形状等を確認したが、近現代の遺物が出土したことから時期的には新しい遺構と判断し、すべて完掘した。溝跡の性格は、畑の畝跡と考えられる。

土坑は5基のうち1～4号土坑を半截している。いずれも隅丸方形や不整形な平面形であり、深さ約0.1m程度と浅く、出土遺物も少なかったことから、性格は不明である。Pitについては、平面形の確認に止め、掘削は行っていない。

惣堀については、既存の護岸として石積みが施されていたが、調査の結果、トレンチ1西端部では明確な立ち上がりは確認されず、遺構面が断ち割られているような状況が確認された。トレンチ2南端部では、護岸石積みから約1.8m内側で堀跡の立ち上がりが検出された。全体の形状等は不明であったが、既存の護岸軸に沿った形で掘り込まれた素掘りの堀であり、この地点では石積み等は確認されなかった。

出土遺物：遺構に伴う遺物は、65～70が上層の畑の畝跡と考えられる溝跡群からの出土であり、71～73は17号溝跡から出土している。その他74～84までは出土位置を計測した上での取り上げや一括であるが、74～81までがかわらけで、うち74～76、80・81は熔融物付着土器であり、82は徳利、83は青花碗、84は須恵器であった。

トレンチ3（遺構：図14 遺物：なし）

位置：G 2 - 42、G 2 - 52・53グリッド

調査状況：東西方向に設定したトレンチ規模は、長さ約7.0m、幅約2.2mで調査し、トレンチ1・2同様盛土を除去したところで調査を開始した。トレンチ北東側は大きく搅乱を受けていたものの、他は比較的良好な状態であったため、確認作業を進めたところ、トレンチ南側で惣堀が確認された。

検出遺構：既存の惣堀護岸石積みの内側からトレンチ2と同様に素掘りの堀の立ち上がりが検出されている。規模等は一部分であるため定かではないが、トレンチ3南側に存在する溜池開削時に破壊を免れたことは幸いであった。

出土遺物：少量ながら出土しているものの、掲載遺物はない。護岸石積み裏の栗石屑から江戸後期の茶碗片が出土している。

トレンチ4（遺構：図14 遺物：なし）

位置：F 2 - 76・77・86グリッド

調査状況：東西方向に設定したトレンチ規模は、長さ約7.0m、幅約3.0mで調査したが、全体に搅乱が著しく、特に西側はコンクリート擁壁によってすべて破壊されていた。しかし、トレンチ東側では深さ約0.7mで水田層が確認されたことから、遺構面が残存する可能性もあるとして、人力で確認作業を進めた。

検出遺構：トレンチ南・西側は大きく搅乱を受けており、東側で僅かに残された水田層直下の確認においても明確な遺構は検出されなかった。ただし、地山層が検出されたことにより、調査区を含む敷地北側一帯の地盤の高さを確認することはできた。

出土遺物：遺物なし。

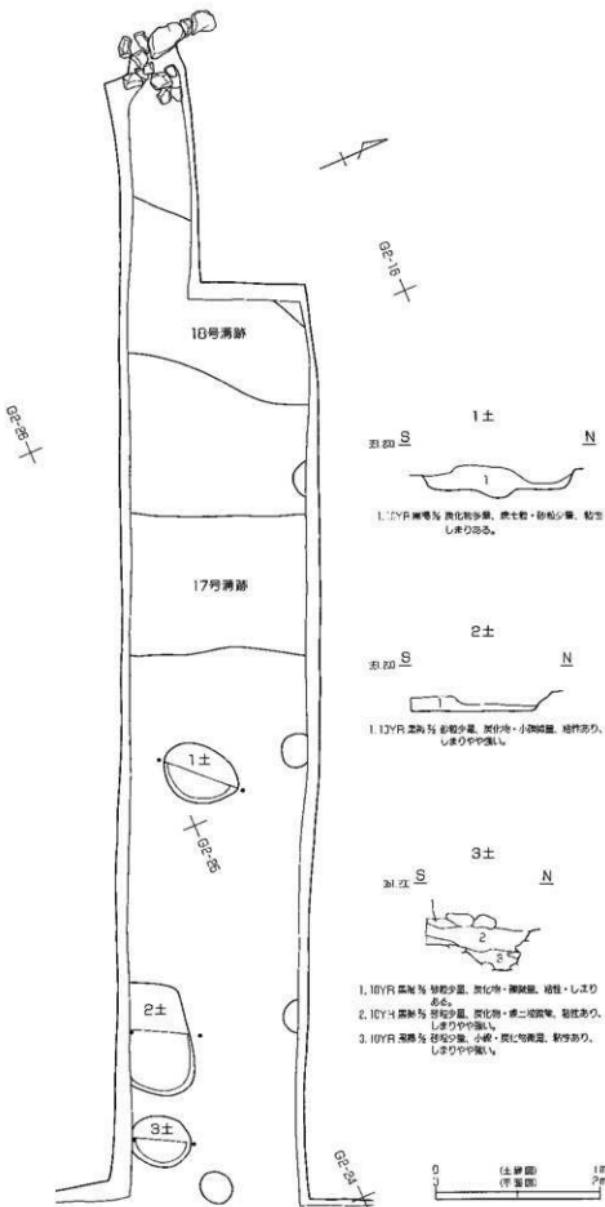


図12 字高堀トレンチ1

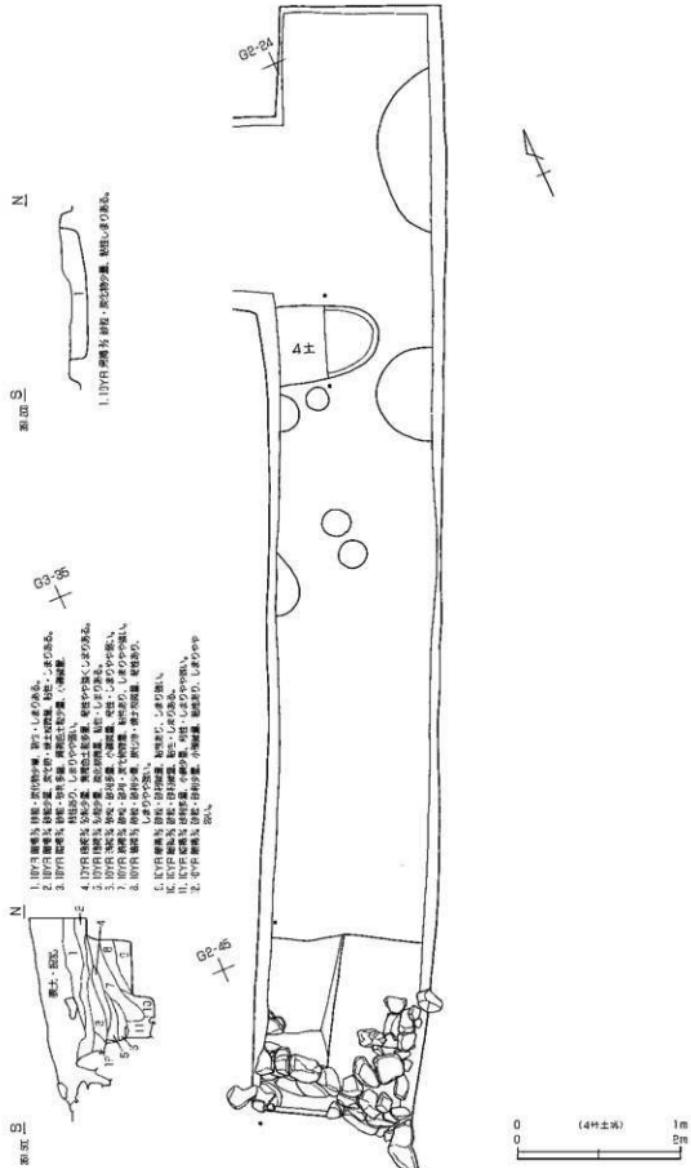
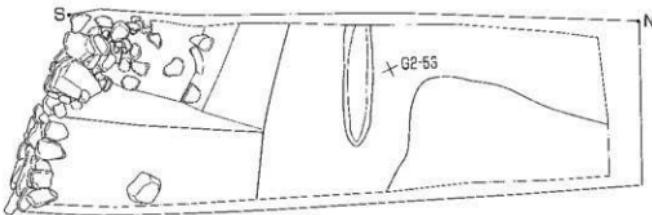
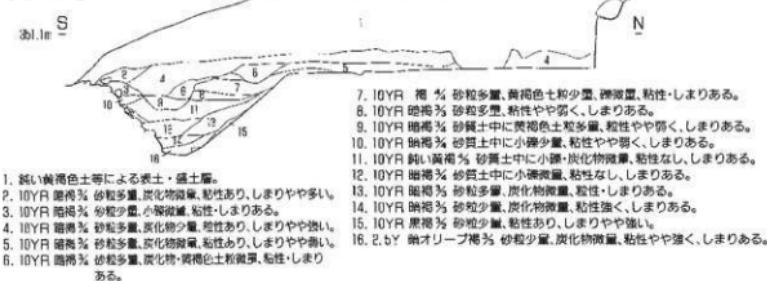


図13 字高塙トレンチ2

トレンチ3



トレンチ4

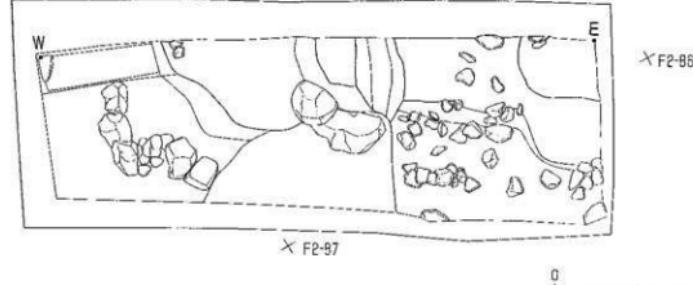
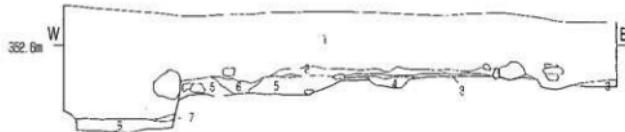


図14 字高堀トレンチ3・4

トレンチ5（遺構：図15・16 遺物：図20・21）

位置：G 2・2・3・13グリッド

調査状況：当初の調査規模は、南北方向に長さ約8.0m、幅約2.0mのトレンチで調査したが、Pitや焼土で覆われた土坑等が確認されたことを受け、調査区の性格を把握するために長さ約9.5m、幅約4.5mまで拡張して調査を実施した。

基本層序は、近接するトレンチ4とは異なり、碎石等による盛土層が約1.0mと厚く、以前の宅地造成が北側の高い敷地に合わせて平坦面が造り出されたことが確認された。盛土層直下には水田層が検出され、遺構面は、水田層除去後に全体的に確認された。

検出遺構：溝跡1条、土坑4基、Pit13基を検出し、いずれも半蔵によって確認している。溝跡は調査区を東西方向に横断しており、上層の形状は不整形であったが、地山を掘り込む下層はU字の断面形であった。

土坑のうち、1号土坑については、床面全体が焼けており、覆土中にも焼土や炭化物が多く含まれていた。このことから、竈や鍛冶など火を扱った場所であると考えられるが、用途の特定はできなかった。

Pitについては、部分的な調査であったために全体像の確認はできなかったが、調査区東壁際のPit 3・7・9は、規模や輪線も類似することから、掘立柱建物跡などの構造物である可能性も想定された。

出土遺物：遺構に伴う遺物は、85・86が1号溝跡からの出土であり、86には熔融物が付着していた。

1号土坑からは87の常滑窯片が出土し、2号土坑からは88・89のかわらけと113の古銭（天祐通寶？）が出土しており、89のかわらけには熔融物が付着していた。Pit 1からは90・91・92のかわらけ、Pit 9からは117の占銭（永楽通寶）、Pit 10からは93の熔融物が付着したかわらけがそれぞれ出土した。

その他、調査区内からはかわらけを中心に出土しており、94から99までがかわらけで、うち97～99までは熔融物が付着している。100は瀬戸美濃摺鉢、101は焼き締めの大皿であり、102・103のかわらけは、調査区北西の焼土等が多量に含まれた包含層摺削時に出土したものであるが、後に1号土坑が検出されたため、遺構に伴うものであった可能性もあるが、確証が得られなかったために遺構とは別に掲載した。

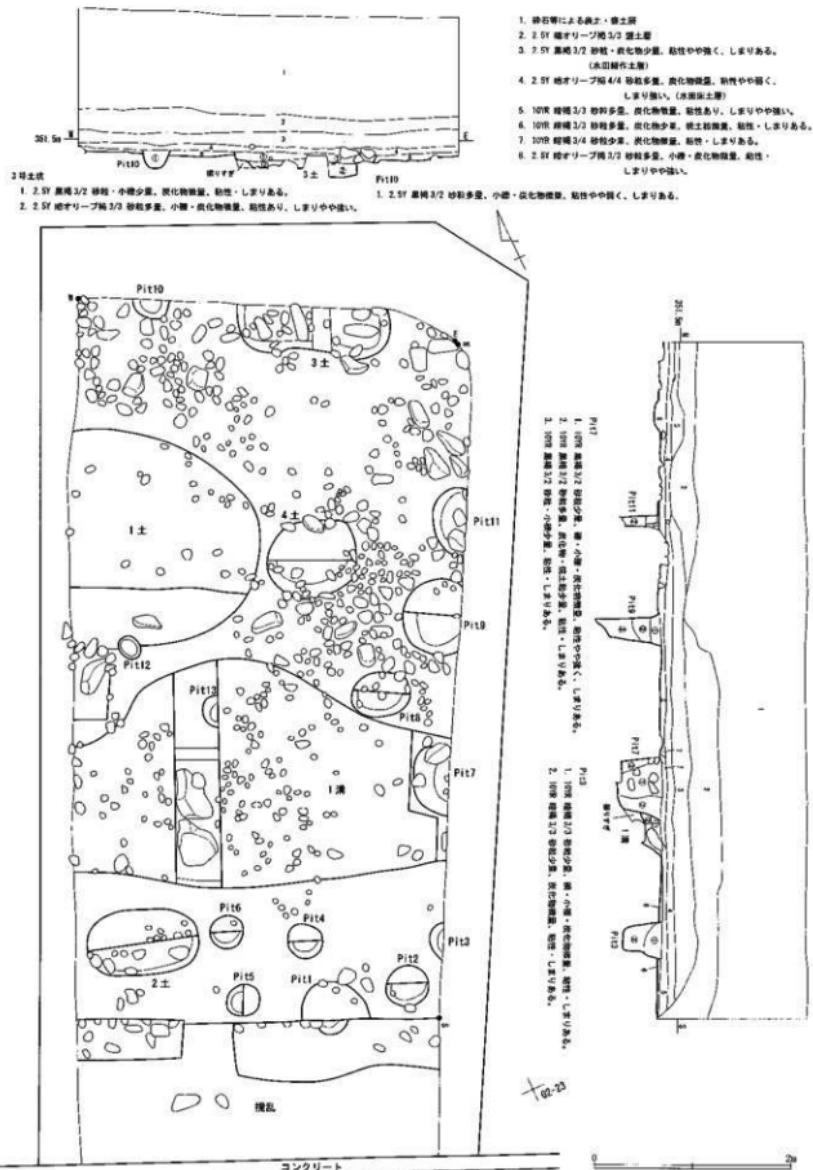


図15 字高堀トレンチ5

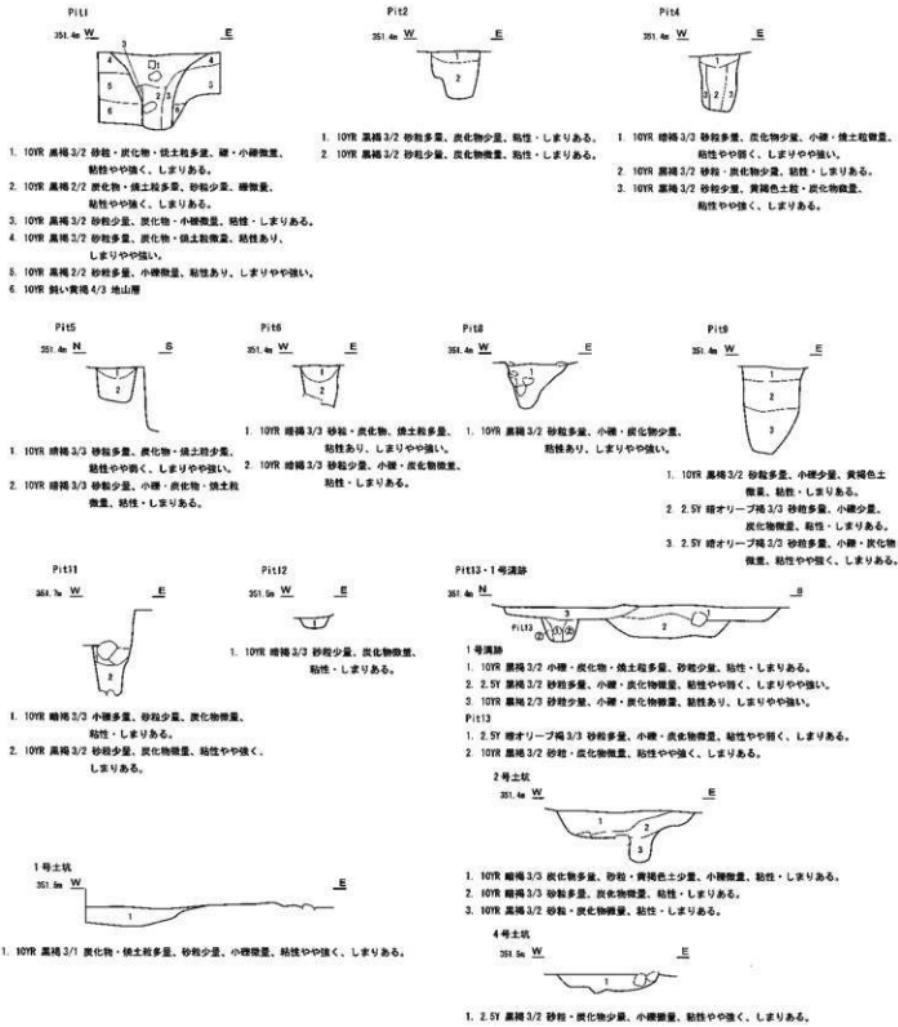


図16 字高堀トレンチ5 遺構断面図

出土遺物観察表

単位: cm ()は反転実測による復元値

揭露番号	実測番号	出土位置・遺構	産地	器種	法 口 径	器 高	底 径	重 量	色 調	焼成	備考
1	13	三角トレンチ1 G1 - 67Nn1 F1:1	在地	丸貫香炉	10.0	6.9	7.7	5Y オリーブ黒 3/4	良		
2	72	三角トレンチ1 G1 - 88Nn2	在地	かわらけ	(10.7)	2.1	(5.6)	7.5YR 美い緑 7/4	良		
3	73	三角トレンチ1 G1 - 88	在地	火鉢	-	-	-	7.5YR 美い緑 6/4	良		
4	1	三角トレンチ2 H1 - 8Nn11 1号 sond	在地	かわらけ	10.1	2.0	4.8	7.5YR 緑 7/6	良		
5	126	三角トレンチ2 H1 - 8Nn25 1号土坑	在地	かわらけ	-	-	5.1	2.5Y 灰黄 6/2	良	焼融物付着	
6	25	三角トレンチ2 H1 - 18Nn2	在地	かわらけ	-	-	(7.4)	7.5YR 美い緑 6/4	良		
7	28	二角トレンチ2 H1 - 18Nn4	在地	かわらけ	(10.7)	2.3	(6.0)	7.5YR 美い緑 6/4	良		
8	40	二角トレンチ2 H1 - 8	在地	かわらけ	(9.3)	1.9	(5.6)	10YR 純い黄緑 7/4	良		
9	42	二角トレンチ2 III 1	瀬戸美濃	灰釉皿	(11.8)	-	-	10YR 灰白 8/2	良		
10	127	二角トレンチ2 III 1 - 8Nn13 - 28	中国	青花皿	(11.8)	2.1	7.4	N 灰白 8/	良		
11	24	二角トレンチ3 III 1 - 38	在地	かわらけ	(9.7)	2.7	(5.8)	7.5YR 緑 7/6	良		
12	123	二角トレンチ3 H1 - 39Nn9	在地	かわらけ	(10.6)	2.3	6.5	7.5YR 美い緑 6/4	良		
13	39	二角トレンチ3 H1 - 38	在地	かわらけ	(13.0)	-	-	7.5YR 純い緑 5/4	良		
14	38	二角トレンチ3 H1 - 38Nn6	在地	鉢	-	-	(14.2)	7.5YR 緑 6/6	良		
15	41	二角トレンチ3 H1 - 38	瀬戸美濃	灰釉皿	-	-	(6.5)	10YR 純黄緑 8/4	良		
16	30	二角トレンチ3 H1 - 38Nn5	瀬戸美濃	灰釉皿	-	-	(5.8)	2.5Y 灰白 8/1	良		
17	34	二角トレンチ3 H1 - 28Nn5	瀬戸美濃	鉢	-	-	-	5Y 灰白 8/1	良		
18	36	二角トレンチ3 H1 - 38Nn2	中国	青花皿	-	-	(7.0)	N 灰白 8/	良		
19	42	二角トレンチ4 H1 - 48	瀬戸美濃	灰釉皿	(9.4)	-	-	2.5Y 灰白 8/2	良		
20	20	二角トレンチ5 H1 - 68Nn6 1号 sond	在地	かわらけ	(7.8)	2.1	(4.8)	7.5YR 純い緑 6/4	良		
21	22	二角トレンチ5 H1 - 69Nn5 1号 sond	在地	かわらけ	(7.0)	1.6	(4.6)	5YR 純い緑 6/4	良		
22	3	二角トレンチ5 H1 - 79Nn6 1号 sond	在地	かわらけ	(6.9)	1.8	(3.9)	7.5YR 純い緑 6/4	良		
23	37	二角トレンチ5 H1 - 69Nn6 10号 sond	在地	火鉢	-	-	-	7.5YR 純い緑 7/4	良		
24	14	二角トレンチ5 H1 - 79Nn6 1号 sond	在地	人形	-	4.7	-	7.5YR 純い緑 7/4	良		
25	35	二角トレンチ5 H1 - 69Nn4 1号 sond	中国	青花碗	(11.6)	-	-	7.5Y 灰白 8/1	良		
26	125	二角トレンチ5 H1 - 58 1号土坑	瀬戸美濃	灰釉皿	-	-	-	5Y 灰白 7/1	良		
27	4	二角トレンチ5 H1 - 78Nn8	在地	かわらけ	(7.4)	1.8	(4.1)	5YR 純い緑 6/4	良	口縁面焼	
28	5	二角トレンチ5 H1 - 79Nn4	在地	かわらけ	-	-	5.6	5YR 明赤緑 5/6	良		
29	25	二角トレンチ5 H1 - 79Nn10	在地	かわらけ	-	-	(6.2)	2.5Y 灰黄 6/2	良		
30	29	二角トレンチ5 III 79Nn9	瀬戸美濃	灰釉皿	(11.0)	-	-	2.5Y 灰黄 7/2	良		
31	44	二角トレンチ5 H1 - 78	中国	白磁皿	(12.0)	-	-	2.5Y 灰白 7/1	良	31と同 -か	
32	32	二角トレンチ5 III 78Nn11	中国	白磁皿	(12.0)	-	-	2.5Y 灰白 7/1	良	32と同 -か	
33	33	二角トレンチ5 III - 68Nn3	中国	白磁皿	(11.0)	-	-	5Y 灰白 7/1	良		
34	27	二角トレンチ6 III - 88	在地	かわらけ	12.2	2.5	6.9	7.5YR 純い緑 6/4	良		
35	26	二角トレンチ6 III - 89Nn4	在地	かわらけ	(11.4)	2.2	(5.7)	7.5YR 純い緑 7/4	良		
36	19	二角トレンチ6 III - 98Nn1	在地	かわらけ	(13.5)	2.9	(7.2)	7.5YR 純い緑 7/4	良		
37	31	二角トレンチ6 III - 88Nn3	中国	白磁皿	-	(6.2)	5Y 灰白 8/1	良			
38	6	二角トレンチ7 I 1 - 994	在地	かわらけ	(3.3)	0.9	3.0	7.5YR 純い緑 7/4	良		
39	70	二角トレンチ7 I 1 - 19	中国	白磁皿	(11.6)	-	-	5Y 灰白 8/1	良		
40	54	二角トレンチ8 I 1 - 29Nn3	在地	かわらけ	(11.6)	-	-	7.5YR 緑 6/6	良		
41	64	二角トレンチ8 I 1 - 39	在地	かわらけ	(7.0)	-	-	5Y 灰 5/1	良	焼融物付着	
42	55	二角トレンチ8 I 1 - 39Nn2	在地	かわらけ	(11.7)	-	-	7.5YR 純い緑 6/4	良		
43	63	二角トレンチ8 I 1 - 39	瀬戸美濃	灰釉皿	(11.0)	-	-	5Y 灰 4/1	不良	二次焼熱か	
44	65	二角トレンチ8 I 1 - 39	瀬戸美濃	灰釉皿	(11.4)	-	-	5Y 灰白 8/1	良		
45	66	二角トレンチ8 I 1 - 39	瀬戸美濃	灰釉皿	(11.6)	-	-	7.5Y 灰白 7/1	良		
46	60	二角トレンチ9 I 1 - 59Nn3	在地	かわらけ	11.7	2.7	6.4	7.5YR 純い緑 7/4	良		
47	56	二角トレンチ9 I 1 - 69Nn4	在地	かわらけ	-	-	(6.4)	5YR 緑 6/6	良		
48	59	二角トレンチ9 I 1 - 59Nn9	在地	火鉢	(26.0)	-	-	7.5YR 純い緑 6/4	良		
49	67	二角トレンチ9 I 1 - 59	瀬戸美濃	灰釉皿	-	-	(6.7)	2.5Y 灰黄 7/2	良		
50	57	二角トレンチ9 I 1 - 59Nn3	瀬戸美濃	灰釉皿	-	-	(6.4)	7.5YR 灰白 8/1	良		
51	58	二角トレンチ9 I 1 - 69Nn3	中国	白磁皿	(13.5)	-	-	N 灰白 8/	良		
52	15	二角トレンチ10 I 1 - 80Nn1	中国	白磁皿	-	-	(9.3)	N 灰白 8/	良		
53	49	二角トレンチ12 H2 - 92	在地	かわらけ	(11.3)	-	-	7.5YR 純い緑 7/4	良		
54	50	二角トレンチ12 H2 - 92	在地	かわらけ	(8.0)	-	-	5Y 灰 5/1	良	焼融物付着	
55	48	二角トレンチ12 H2 - 93	在地	内耳縁	-	-	-	7.5YR 緑 7/6	良		
56	52	二角トレンチ12 H2 - 94	中国	青花碗	(11.6)	-	-	7.5Y 灰白 8/1	良		
57	60	二角トレンチ14 I 1 - 5	在地	かわらけ	(9.6)	-	-	7.5YR 純い緑 7/4	良		
58	53	二角トレンチ14 I 1 - 4	在地	かわらけ	(11.6)	-	-	2.5Y 灰黄 5/1	良	焼融物付着	
59	69	二角トレンチ14 I 1 - 5	瀬戸美濃	灰釉小杯	-	-	(5.8)	2.5Y 灰黄 7/3	良		
60	124	二角トレンチ15 I 1 - 0Nn3	瀬戸美濃	灰釉皿	-	-	(6.0)	2.5Y 灰黄 7/2	良		

出土遺物観察表

単位: cm ()は反転実測による復元値

場所 番号	実測 番号	出土位置・遺構	産地	器種	法 口 径			重 量	色 調	焼成	備 考
					直 径	横 幅	高 さ				
61	12	二角トレンチ15 H2 - 71Nn2	在地	五輪塔	直 21.5	横 14.0	高 12.5		-	-	
62	47	三角トレンチ17 H2 - 71Nn7	在地	かわらけ	-	-	(6.0)	5Y 灰 5/1	良	熔融物付着	
63	45	三角トレンチ17 H2 - 72Nn2	不明	砥石	長 (4.0)	幅 0.5	厚さ 1.3	-	-	-	
64	46	三角トレンチ17 H2 - 71Nn12	在地	須恵器甕	-	-	-	2.5Y 灰白 7/1	良		
65	88	高壠トレンチ1 G2 - 15Nn1 2号 sondage	在地	かわらけ	(11.6)	-	-	7.5YR 鑄い桜 7/6	良		
66	89	高壠トレンチ1 G2 - 24Nn3 3号 sondage	在地	かわらけ	(14.7)	-	-	5YR 鑄い桜 6/4	良		
67	97	高壠トレンチ1 G2 - 24Nn1 5号 sondage	瀬戸美濃	天目茶碗	(11.0)	-	-	2.5Y 灰黄 6/2	良		
68	7	高壠トレンチ1 G2 - 24Nn9 7号 sondage	在地	かわらけ	(8.0)	2.0	(4.7)	2.5Y 黄灰 5/1	良	熔融物付着	
69	98	高壠トレンチ2 G2 - 34Nn1 8号 sondage	中国	青磁碗	-	-	-	5Y 灰白 8/1	良		
70	96	高壠トレンチ2 G2 - 44Nn1 12号 sondage	盆地不明	陶器皿	-	-	(6.0)	5YR 鑄い赤桜 5/4	良		
71	95	高壠トレンチ1 G2 - 15Nn7 17号 sondage	在地	かわらけ	-	-	(6.6)	5Y 灰 5/1	良	熔融物付着	
72	16	高壠トレンチ1 G2 - 15Nn7 17号 sondage	瀬戸美濃	天目茶碗	(11.5)	-	-	2.5Y 灰白 8/2	良		
73	99	高壠トレンチ1 G2 - 15Nn9 17号 sondage	盆地	常滑窯	-	-	-	5Y 灰 4/1	良		
74	92	高壠トレンチ1 G2 - 15Nn17	在地	かわらけ	(10.5)	-	-	2.5Y 灰黄 6/2	良	熔融物付着	
75	93	高壠トレンチ1 G2 - 16Nn2	在地	かわらけ	(7.5)	1.7	(4.9)	2.5Y 灰黄 7/2	良	熔融物付着	
76	94	高壠トレンチ2 G2 - 23Nn5	在地	かわらけ	-	-	(5.0)	2.5Y 灰黄 5/1	良	熔融物付着	
77	91	高壠トレンチ5 G2 - 13Nn1	在地	かわらけ	-	-	(7.3)	5YR 明赤桜 5/6	良		
78	90	高壠トレンチ2 G2 - 34	在地	かわらけ	(8.5)	-	-	2.5Y 鑄い桜 5/3	良	内面揮付着	
79	71	高壠トレンチ2 G2 - 45	在地	かわらけ	-	-	(8.4)	5YR 桜 6/6	良		
80	100	高壠トレンチ2	在地	かわらけ	(7.6)	-	-	2.5Y 黄灰 6/1	良	熔融物付着	
81	101	高壠トレンチ2	在地	かわらけ	(9.6)	-	-	2.5Y 灰黄 6/2	良	熔融物付着	
82	102	高壠トレンチ2	瀬戸美濃	濱利	-	-	(13.0)	7.5YR 桜 7/6	良		
83	9	高壠トレンチ2	中国	青花碗	-	-	(7.0)	2.5CY 灰白 8/1	良		
84	10	高壠トレンチ2	在地	須恵器	-	-	-	2.5CY オリーブ灰 6/	良		
85	79	高壠トレンチ5 G2 - 13Nn10 1号 sondage	在地	かわらけ	(10.4)	-	-	10YR 鑄い青桜 7/4	良		
86	81	高壠トレンチ5 G2 - 13Nn21 1号 sondage	在地	かわらけ	(8.0)	-	-	2.5Y 黄灰 5/1	良	熔融物付着	
87	11	高壠トレンチ5 G2 - 3Nn3 1号土坑	常滑	常滑瓶	-	-	-	2.5Y 茶褐色 3/1	良		
88	77	高壠トレンチ5 G2 - 13Nn4 2号土坑	在地	かわらけ	(12.0)	2.2	(8.0)	5YR 鑄い桜 6/4	良		
89	82	高壠トレンチ5 G2 - 13Nn6 2号土坑	在地	かわらけ	(11.5)	-	-	2.5Y 黄灰 5/1	良	熔融物付着	
90	83	高壠トレンチ5 G2 - 13Nn15 Pit1	在地	かわらけ	-	-	(8.0)	5YR 鑄い桜 6/3	良		
91	2	高壠トレンチ5 G2 - 13Nn27 Pit1	在地	かわらけ	8.8	2.1	4.5	5YR 桜 6/6	良		
92	17	高壠トレンチ5 G2 - 13Nn28 Pit1	瀬戸美濃	灰釉皿	(11.6)	(1.9)	-	5Y 灰白 8/2	良		
93	80	高壠トレンチ5 G2 - 3Nn6 Pit10	在地	かわらけ	(10.8)	-	-	2.5Y 黄灰 6/1	良	熔融物付着	
94	86	高壠トレンチ5 G2 - 2Nn5	在地	かわらけ	-	-	(6.7)	7.5YR 鑄い桜 6/4	良		
95	74	高壠トレンチ5 G2 - 13	在地	かわらけ	-	-	(6.0)	10YR 鑄い黄桜 6/4	良		
96	78	高壠トレンチ5 G2 - 13	在地	かわらけ	(14.0)	-	-	7.5YR 桜 6/6	良	口縁部焼	
97	87	高壠トレンチ5 G2 - 13	在地	かわらけ	-	-	-	2.5Y 黄灰 5/1	良	熔融物付着	
98	8	高壠トレンチ5 G2 - 2Nn1	在地	かわらけ	(10.6)	2.3	(5.9)	2.5Y 黄灰 6/1	良	熔融物付着	
99	18	高壠トレンチ5 G2 - 23・25	在地	かわらけ	(11.1)	2.4	(5.5)	2.5Y 灰黄 6/2	良	熔融物付着	
100	88	高壠トレンチ5 G2 - 3Nn1	瀬戸美濃	擂鉢	-	-	-	7.5YR 鑄い桜 6/4	良		
101	84	高壠トレンチ5 G2 - 13Nn3	瀬戸美濃	人皿	(23.6)	-	-	2.5Y 淡黄 7/3	良		
102	75	高壠トレンチ5 烧土層	在地	かわらけ	-	-	(15.0)	2.5Y 灰黄 6/2	良	熔融物付着	
103	76	高壠トレンチ5 烧土層	在地	かわらけ	(11.6)	-	-	7.5YR 鑄い桜 6/4	良		
104	103	三角トレンチ4 11 5	-	铁製品	-	-	-	-	-	-	
105	106	三角トレンチ4 111 48	-	钉	-	-	-	-	-	-	
106	104	三角トレンチ12 112 92	-	钉	-	-	-	-	-	-	
107	105	三角トレンチ12 112 93	-	钉	-	-	-	-	-	-	
108	107	二角トレンチ8 11 39	-	钉	-	-	-	-	-	-	
109	108	高壠トレンチ5 Pit4	-	钉	-	-	-	-	-	-	
110	116	三角トレンチ2 111 18Nn3	-	鋼製品	-	-	-	-	-	-	
111	115	三角トレンチ17 112 71Nn9	-	鋼製品	-	-	-	-	-	-	
112	111	三角トレンチ12 112 93	-	鋼製品	-	-	-	-	-	-	
113	120	高壠G2 - 13Nn5 2号土坑	-	古鐵	径2.32	厚0.12	重2.3	-	-	-	天槽通宵?
114	119	三角トレンチ12 112 91	-	古鐵	-	厚0.11	重0.7	-	-	-	不明
115	118	三角トレンチ7 11 19	-	古鐵	径2.46	厚0.1	重1.3	-	-	-	擴元通宵
116	117	三角トレンチ9 11 - 59Nn11	-	古鐵	径2.23	厚0.10	重1.5	-	-	-	縮元通宵
117	122	高壠トレンチ5 Pit9	-	古鐵	径2.40	厚0.12	重1.3	-	-	-	永楽通宵

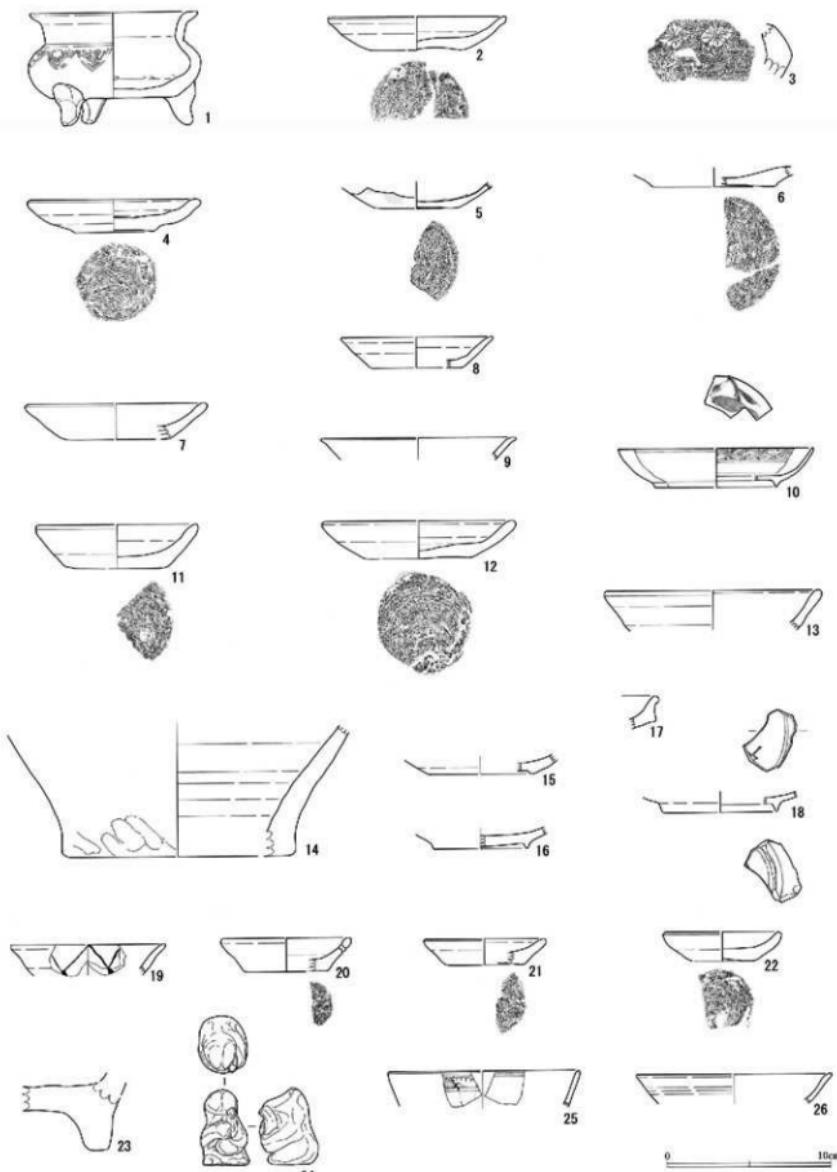


图17 字三角出土遗物（1）

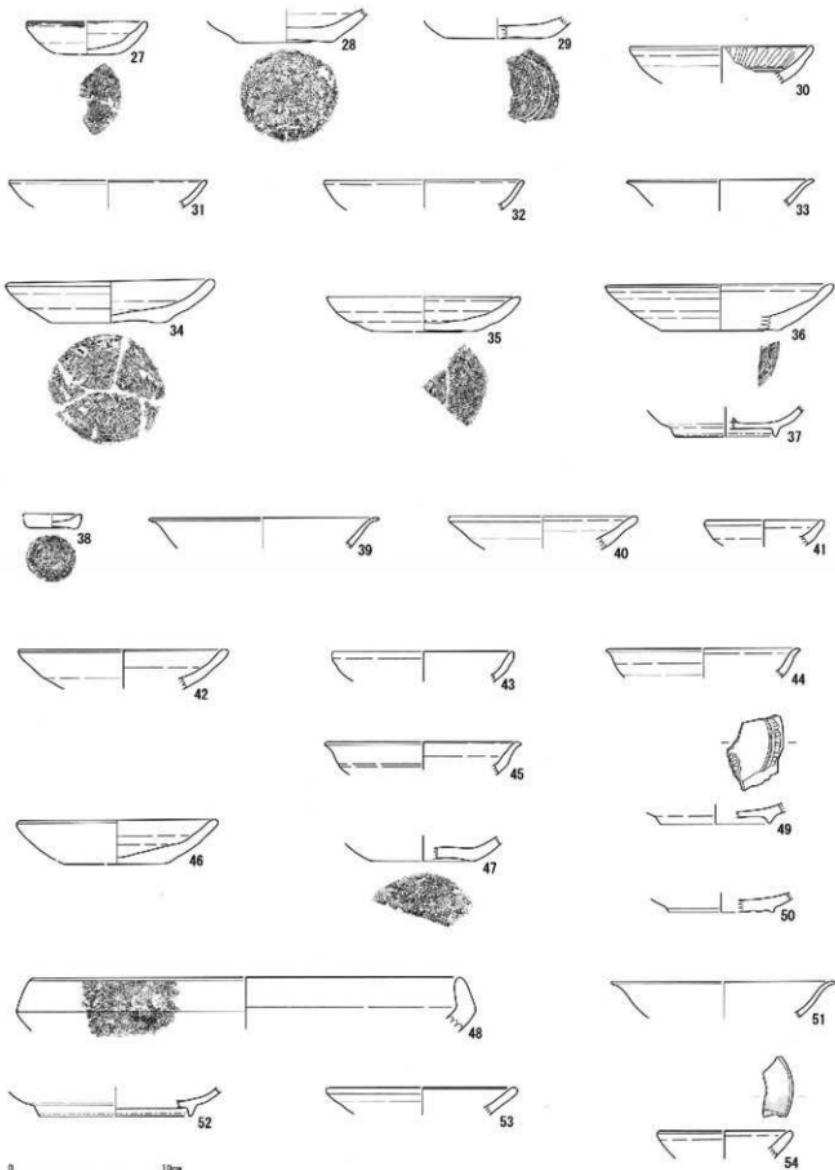


圖18 字三角出土遺物（2）

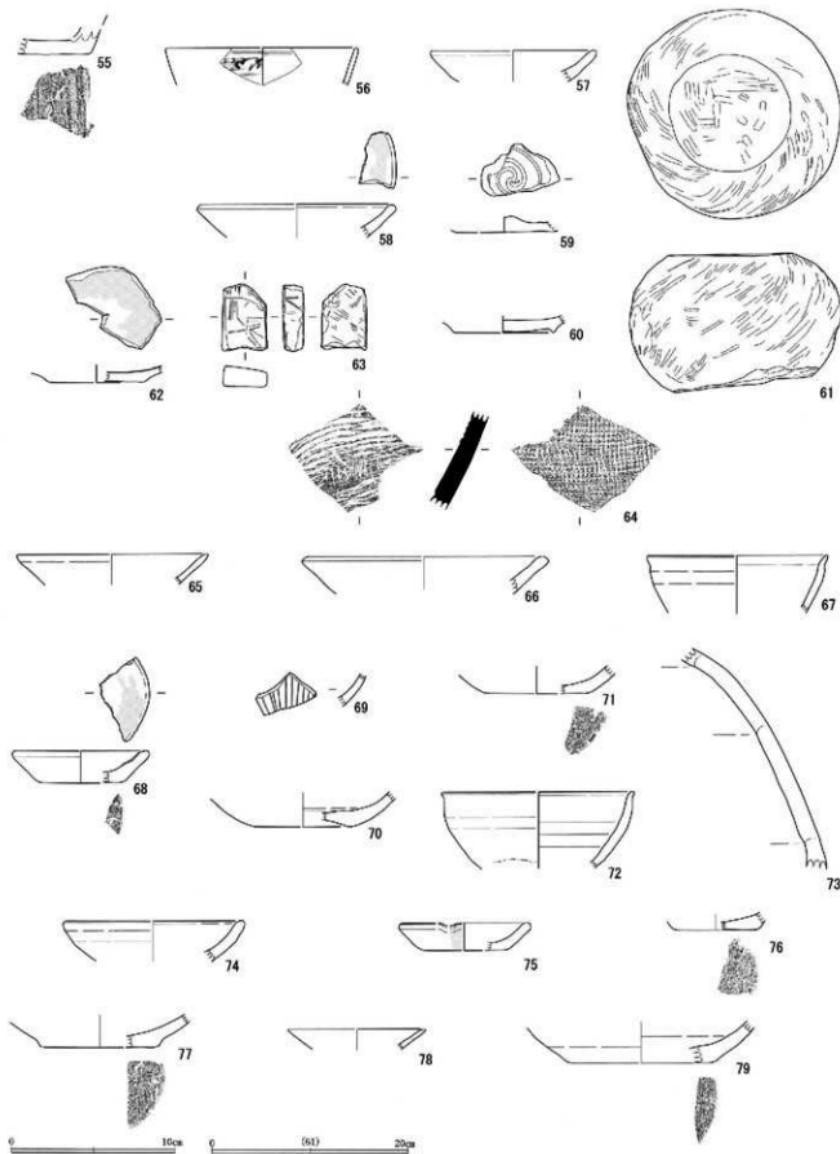


图19 字三角出土遗物 (3) · 字高埠出土遗物 (1)

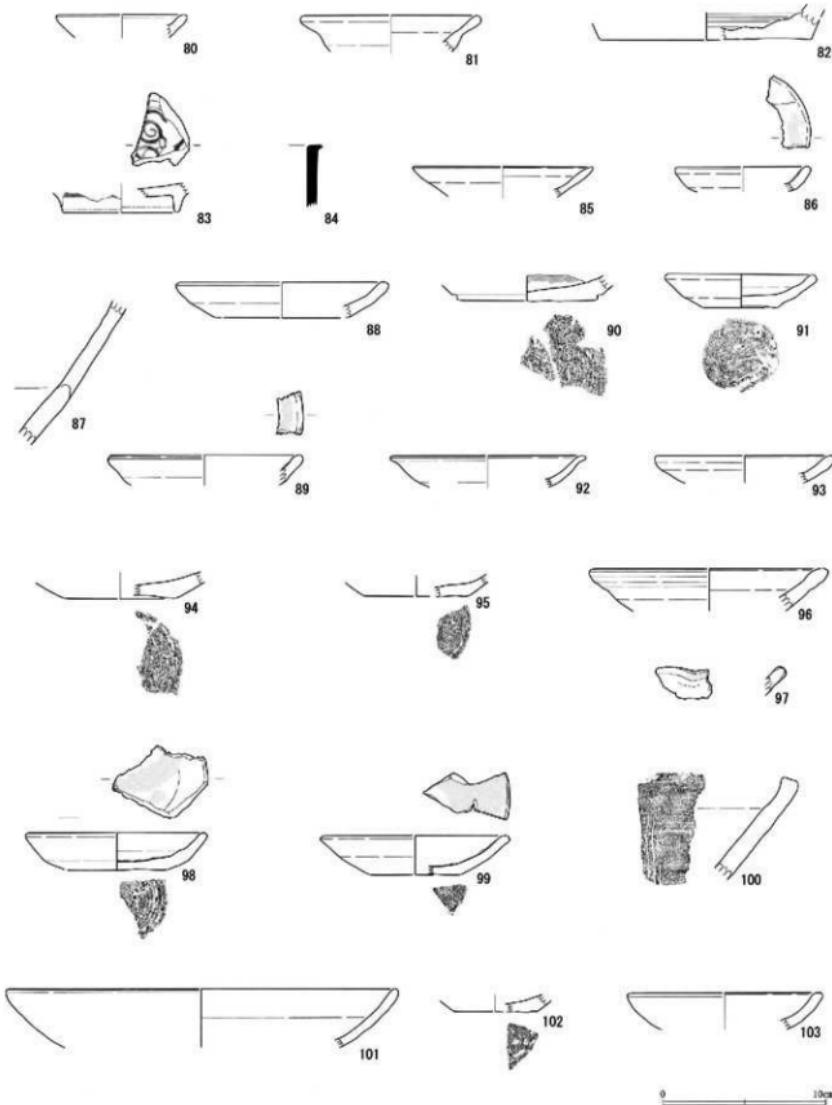


图20 字高埠出土遗物（2）

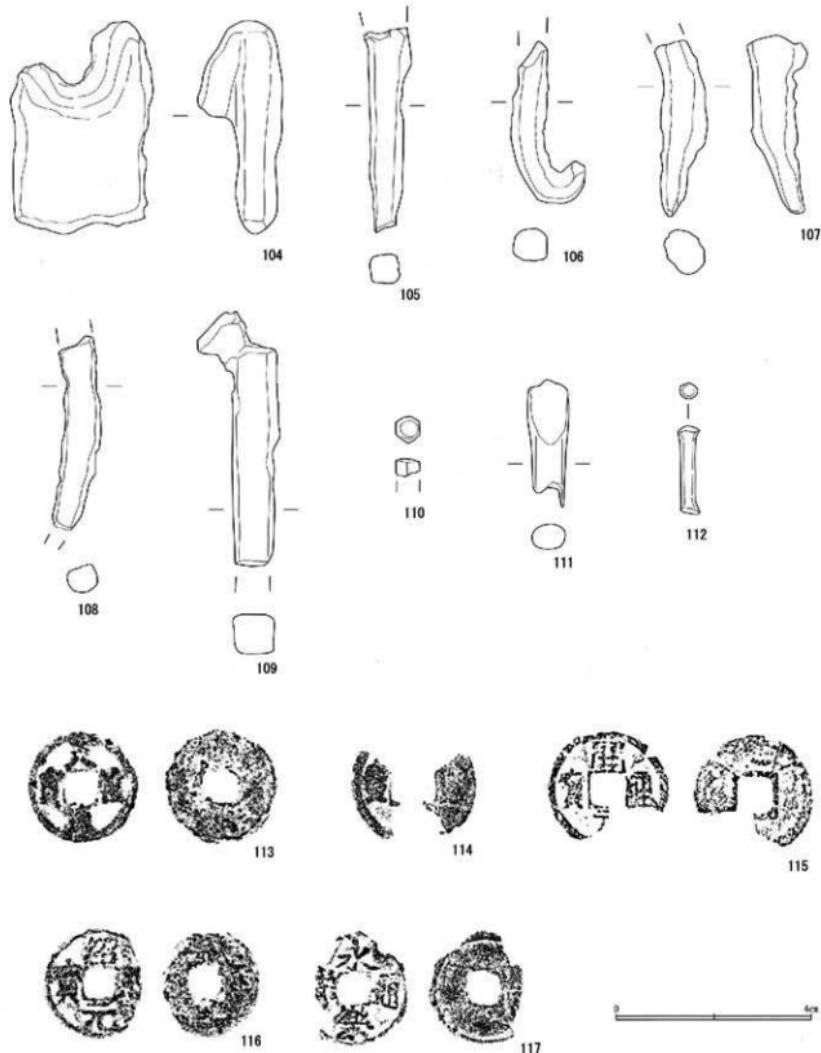


図21 字三角・字高塚出土金属製品

第4章 自然科学分析

第1節 史跡武田氏館跡大手周辺から出土した炭化種実

佐々木由香・バンダーリスダルシャン（バレオ・ラボ）

1. はじめに

史跡武田氏館跡は、永正16年(1519)に武田信虎によって築かれた館であり、62年間武田氏の本拠として整備された。ここでは城下町にあたる宇三角で武田氏の時期である16世紀前半と想定されている埋土出土の炭化種実を検討し、当時の利用植物の推定を試みた。

2. 試料と方法

試料は、字三角のII-5グリッドのサブトレーンチ内から回収された土壤(埋土)試料である。土壤は焼土ブロックと炭化物を多く含む、礫(最大径6cm程度)混じりの砂質シルト層であった。調査の所見から、火災後に堆積した埋土と考えられている。

土壤は、0.25mm目の籠を用いて浮遊物を回収した後、0.425mm目の籠を用いて水洗洗浄し、回収した残渣から実体顕微鏡下で炭化種実の抽出・同定・計数を行った。また残渣中に炭化材が多く含まれていたため、樹種同定可能な大きさの材のみ抽出し、保管した。同定された種実および抽出した材は甲府市教育委員会で保管している。

3. 結果

全試料で同定された分類群は、草本植物のイヌタデ属炭化果実、アカネ属炭化種子、ヒエ炭化果実・種子、イネ炭化果実・種子、アワ炭化種子の5分類群であった。イネには一辺が3cm以下の炭化果実・種子塊が複数みられた。この他に同定できなかった不明A炭化種子と不明B炭化種子があった。土壤試料から産出した種実の分類群・部位・産出数は表1に示した。イネの破片の個数は任意に抽出した100個(0.7g)から重量換算した復元個体数である。出土個数は、イヌタデ属が完形1個、アカネ属が完形1個、ヒエが完形14個(果実・種子含む)、イネが完形2627個と破片からの復元個体数が2740個(果実・種子含む)、アワが完形3個、不明Aが完形9個、不明Bが完形1個であった。ヒエおよびイネの一部には果実が部分的に付着していた。

表1 土壤試料の炭化種実同定結果(※は重量換算値)

分類群	部位	産出数
イヌタデ属	炭化果実	1
アカネ属	炭化種子	1
ヒエ	炭化種実	14
イネ	炭化種実	2627(2740※)
アワ	炭化種子	3
不明A	炭化種子	9
不明B	炭化種子	1

※完形イネ100点の重量と、完形以外イネ炭化種実破片の重量を計量して求めた復元個体数

以下に、記載と図版に写真を示し、同定の根拠とする。

(1) イヌタデ属 *Persicaria* 炭化果実 タデ科

炭化果実が出土した。上面観は円形で先端が顯著に尖り、側面観は両凸レンズ状で梢円形に近い。鱗は梢円形でやや突出する。表面にはごく微細な網目文様がある。長さ1.6mm、幅1.3mm。

(2) アカネ属 *Rubia* 炭化種子 アカネ科

炭化種子が出土した。上面観は円形、側面観は梢円形。片側側面に大きな円形の深い孔がある。表面には微細な網目模様がある。長さ1.4mm、幅1.2mm。

(3) ヒエ *Echinochloa crus-galli* P.Beauv. var. *fumentacea* Trin. 炭化果実・種子 イネ科

炭化果実・種子が出土した。種子の側面観は卵形ないし梢円形、断面は片凸レンズ形であるが、厚みは薄くやや扁平である。胚は幅が広く、長さは胚乳の長さの2/3程度と長い。鱗は幅が広いうちわ型。両端部を中心として果実（穎）が少し付着することから、イネと同様、本来は果実（穎果）であったと推定される。果実は鋸歯形。果実の長さは、2.2~2.8（平均2.5）mm、幅は1.5~2.0（平均1.8）mm。種子の長さは、1.8~2.2（平均2.0）mm、幅は1.5~2.0（平均1.7）mm。

(4) イネ *Oryza sativa* L. 炭化果実・種子 イネ科

炭化果実・種子が出土した。一部は果実・種子塊となっていた。種子の上面観は両凸レンズ形、側面観は梢円形。一端に胚が脱落した凹みがあり、両面に中央がやや盛り上がる縦方向の2本の浅い溝がある。種子の長さ4.0~6.0（平均4.8）mm、幅2.5~3.7（平均3.1）mm。果実（穎）が一部に付着したものが目立ち、種子も胚が残存した玄米が目立つことから、元は果実（穎）であったと推定される。果実の表面には規則的に配列する独特の顆粒状突起がある。なお、破片については、重量から換算した復元個体数を求めた。

(5) アワ *Setaria italica* Beauv. 炭化種子 イネ科

炭化種子が出土した。小さいが厚みがあり、上面観は梢円形、側面観は円形に近く、先端が窪むことが多い。胚の長さは胚乳の長さの2/3程度。腹面下端中央の窪んだ位置に細長い梢円形の小さな鱗がある。長さ1.3mm、幅1.0mm程度。

(6) 不明A Unknown A 炭化種子

炭化種子が出土した。上面観は卵形、側面観は球形～扁平で、下端のほぼ中央から内部にむかって湾生の胚珠がある。また胚珠に沿って割れているものがある。形状や大きさからアカザ科やヒユ科などの草本植物の種子と思われるが、遺存状況が悪いため、不明とした。

(7) 不明B Unknown B 炭化種子

炭化種子が出土した。上面観は両凸レンズ形、側面観は先端が尖る卵形で、上部のみ先端にむかって2本の浅い稜線がある。下端には鱗がある。

4. 考察

得られた種実のうち、栽培植物はヒエ、イネ、アワであった。ほとんどイネが占め、復元個体数を含めると5400点弱が確認されたのに対し、ヒエは14点、アワは3点であった。これまでの調査でもG3-77グリッドの土坑から600個余りの炭化種実が出土し、イネが98~99%と圧倒的多数を占め、ヒエ、ダイズの仲間、マメ科が僅かに出土した。今回も同一傾向のほぼイネ単一種から構成される組成であった。ヒエとイネは本来殻付きの状態であったと考えられることから、貯蔵状態にあったものが火災により、炭化したことが示唆される。イヌタデ属やアカネ属などの草本種子は周辺に生育していたものが炭化したと考えられる。

5. おわりに

火災後の埋土から炭化種実が出土し、多量のイネの中に僅かにヒエ、アワが混じるという特異な組成であった。イネとヒエは殻つき（果実）の状態で炭化したことが考えられた。



スケール1-2、6-10:1mm、3-5は一日盛が1mm (4bは任意)

図版1 史跡武田氏館跡から出土した炭化種実

1. イヌタデ属炭化果実、2. アカネ属炭化種子、3. イネ炭化種実塊（塊のみ全体）、4. イネ炭化種実塊（4bは拡大）、5. イネ炭化種子、6. イネ炭化種実塊、7. ヒエ炭化種子（一部果実附着）、8. アワ炭化種子、9. 不明A炭化種子、10. 不明B炭化種子

第2節 史跡武田氏館跡大手周辺出土土器に付着する金属の成分分析

竹原弘展（パレオ・ラボ）

1. はじめに

史跡武田氏館跡大手周辺からは、金属粒および金属滓と見られるものが付着した土器が出土した。これら付着物について蛍光X線分析を行い、その金属の材質を検討した。

2. 試料と方法

分析対象資料は、史跡武田氏館跡大手周辺より出土した戦国時代の土器4点（No.1は98、No.2は99、No.3・No.4は大手調査区の惣堀南土橋出土遺物）に付着する金属粒および金属滓である（図版1）。

分析装置はエネルギー分散型蛍光X線分析装置である（株）堀場製作所製分析顕微鏡XGT-5000TypeIIを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV、1.00mAのロジウム(Rh)ターゲット、X線ビーム径が100 μm または10 μm 、検出器は高純度Si検出器(Xcropy)で、試料室の大きさは350×400×40mmである。検出可能元素はナトリウム(Na)～ウラン(U)であるが、ナトリウム、マグネシウム(Mg)といった軽元素は蛍光X線分析装置の性質上、検出感度が悪いため、試料中に少量含む程度ではピークを検出し難く、検出できてもその定量値はかなり誤差が大きい。また、試料ステージを走査させながら測定することにより元素の二次元的な分布画像を得る、元素マッピング分析も可能である。

本分析では、まず元素マッピング分析を行い元素の分布図を得て、その結果を基に特徴的な箇所のポイント分析を行った。測定条件は、元素マッピング分析では50kV、1.00mA、ビーム径100 μm 、測定時間2000sを5回走査、パルス処理時間P3に、ポイント分析では50kV、0.10～1.00mA（自動設定）、ビーム径100 μm 、測定時間1500s、パルス処理時間P4に設定し、いずれも非破壊で行った。定量分析は標準試料を用いないファンダメンタル・パラメーター法（以下FP法）による半定量分析を装置付属ソフトで行った。そのため、定量値は参考程度にとどめておく必要がある。

3. 結果

元素マッピング図を図1～4に示す。いずれも金属成分としては銅(Cu)、鉛(Pb)がそれぞれ広く分布し、両者より範囲は狭いもののスズ(Sn)の分布も確認された。分析No.3ではヒ素(As)と金(Au)も極一部に分布している様子が確認された。

元素マッピングの結果を基に行ったポイント分析により得られたスペクトルおよびFP法による半定量分析結果を表1および図5～9に示す。アルミニウム(Al)、ケイ素(Si)、リン(P)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ニッケル(Ni)、銅、亜鉛(Zn)、ヒ素、銀(Ag)、スズ、アンチモン(Sb)、金、鉛、ビスマス(Bi)が検出された。

4. 考察

いずれもスズの割合はやや低いものの、銅、スズ、鉛が主に検出されており、土器中の金属はCu-Sn-Pbの銅合金、すなわち青銅の一種であったと推定される。また、銅の含有量が少ない分析No.1からは検出されなかつたものの、それ以外は銀や金などが不純物として銅中に含まれているとみられ、銅中の不純物を分離する工程を経ていないことから国産の銅地金を使用していたと考えられる。いわゆる南蛮吹きと呼ばれる銅中の銀、金などの不純物の分離抽出技術が、蘇我理右衛門によって我が国に導入されたのは、慶長年間（1596～1615）頃と言われており、当遺跡より僅かに時代が下る。

表1 半定量分析結果

分析 No.	分析 ポイント	Al	Si	P	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Xi	Cr	Zn	As	Ag	Sn	Sb	As	Pb	Bi
1	1	5.22	17.57	0.13	1.16	2.07	0.88	0.21	5.76	0.44	20.43	—	0.91	—	1.89	1.14	—	42.20	—
	2	9.86	16.96	1.89	0.76	1.23	0.87	0.11	5.40	0.44	29.60	—	0.15	—	1.73	0.64	—	30.40	—
	3	3.89	12.05	0.32	1.15	4.64	0.89	0.20	7.55	0.20	9.00	—	0.49	—	39.09	0.56	—	19.97	—
	4	7.67	14.55	1.22	0.66	1.84	0.72	0.16	5.89	0.55	8.79	—	1.43	—	5.42	1.22	—	49.89	—
	5	6.36	18.94	0.23	1.48	3.00	1.01	0.27	9.71	0.08	3.36	0.08	0.95	—	2.06	0.56	—	51.88	—
2	1	0.50	0.56	0.20	0.07	0.16	—	—	0.22	—	94.89	—	—	0.94	—	0.46	0.47	1.32	0.24
	2	1.96	3.25	—	0.08	0.10	—	—	0.53	—	91.39	—	—	0.59	0.19	0.68	0.78	0.38	0.15
	3	1.03	22.06	—	—	0.76	0.04	—	2.03	0.13	71.52	—	—	0.37	—	0.35	0.49	1.05	0.17
	4	3.01	6.09	—	—	1.28	0.36	—	9.34	0.34	9.29	—	—	51.05	1.01	—	18.31	—	
	5	4.09	14.42	—	1.50	3.18	0.58	0.15	14.71	0.34	4.70	0.07	—	—	24.48	0.48	—	31.29	—
3	1	6.41	28.37	—	0.13	0.87	0.10	—	1.29	—	56.96	—	—	0.78	—	0.18	4.14	0.27	0.61
	2	3.26	25.60	0.22	0.33	1.45	0.18	0.05	3.27	0.05	63.22	—	—	0.36	—	0.28	0.18	1.34	0.29
	3	9.98	44.79	—	5.49	3.32	0.39	0.16	4.38	—	24.88	—	1.06	—	3.80	0.31	—	1.48	—
	4	7.25	23.49	0.24	1.42	3.24	1.14	0.36	13.39	0.32	29.39	—	0.86	—	1.08	0.42	—	17.57	—
	5	6.18	20.12	0.17	0.76	1.64	0.95	0.15	12.41	0.67	45.55	—	6.55	0.21	0.38	1.96	—	2.37	—
4	1	4.81	27.70	—	0.07	1.27	0.08	—	1.15	—	64.02	—	—	0.29	—	0.15	0.16	0.20	0.11
	2	3.11	21.62	—	—	1.38	0.05	—	0.79	—	71.32	—	—	0.13	0.73	0.25	—	0.62	—
	3	5.85	16.20	0.44	1.09	2.75	1.03	0.18	13.36	0.20	10.53	—	—	—	41.97	0.29	—	6.12	—
	4	4.91	23.66	1.08	2.12	4.50	0.96	0.33	15.03	0.36	10.27	—	0.78	—	2.39	2.02	—	31.59	—
	5	5.94	18.66	0.46	1.02	3.10	0.48	0.07	8.06	0.10	59.61	—	1.18	—	1.63	0.25	—	0.34	—

値は質量% —: 検出できず

分析No.3のポイント1からは金が比較的高い割合で検出された。銅合金のひとつに企を3~5%含み、煮色法により黒色を呈する赤銅と呼ばれる合金が存在する。しかし、今回の場合は、スズや鉛も検出されていること、銅の分布に対して企は極めて局所的であり、また他の試料からも少量の金が検出されていることも併せて、赤銅として金を人為的に添加したものというよりも、銅中の不純物と考えるのが妥当ではないだろうか。この場合、不純物の出来として、銅鉱石由来の他に、例えば金銅製品などを鋳造して利用したことに由来する可能性も考えられよう。

5. おわりに

史跡武田氏館跡大手周辺より出土した土器4点の付着物を分析した結果、いずれも銅、鉛、スズが主に検出された。

参考文献

- 大阪市文化財協会編（1998）住友銅吹所跡発掘調査報告。
村上隆（2003）金工技術、日本の美術第443号、至文堂。

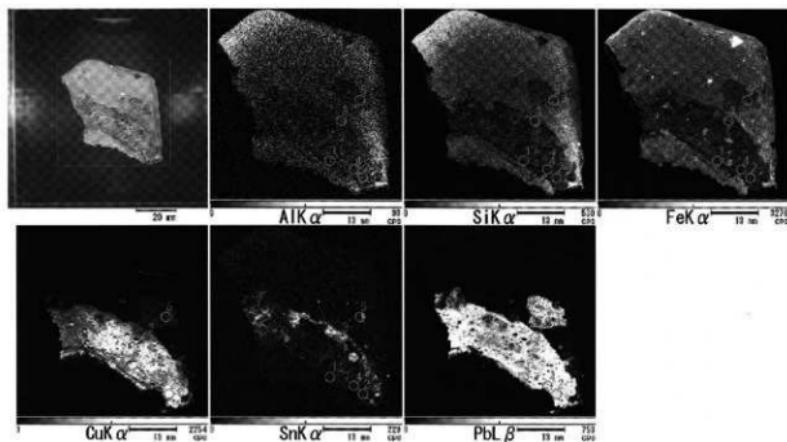


図1 分析No.1 元素マッピング図

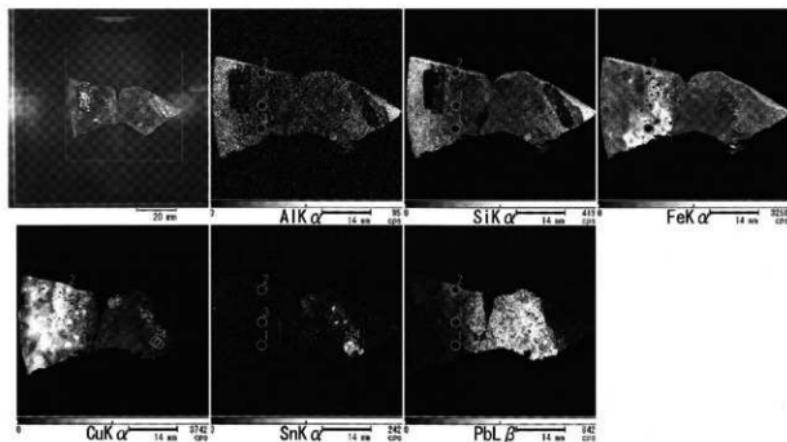


図2 分析No.2 元素マッピング図

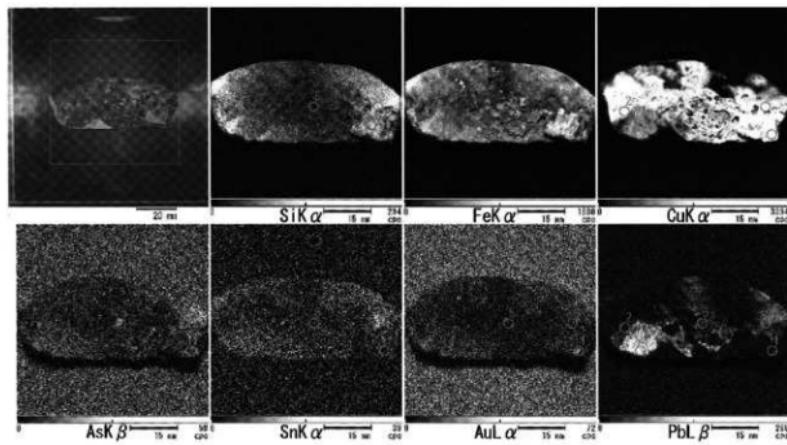


図3 分析No.3元素マッピング図

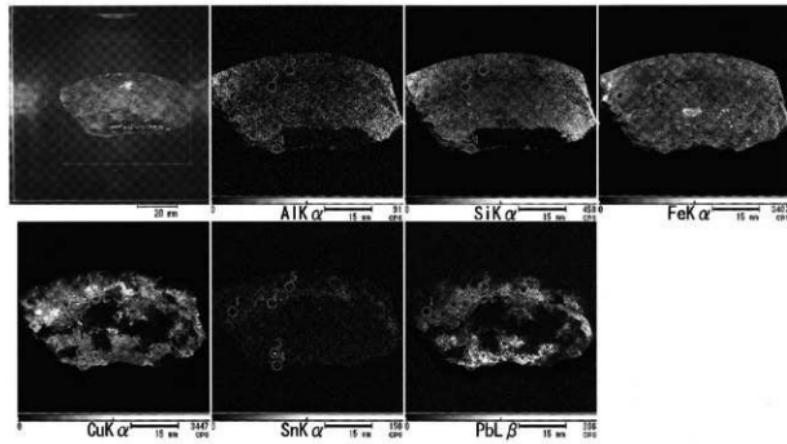


図4 分析No.4元素マッピング図

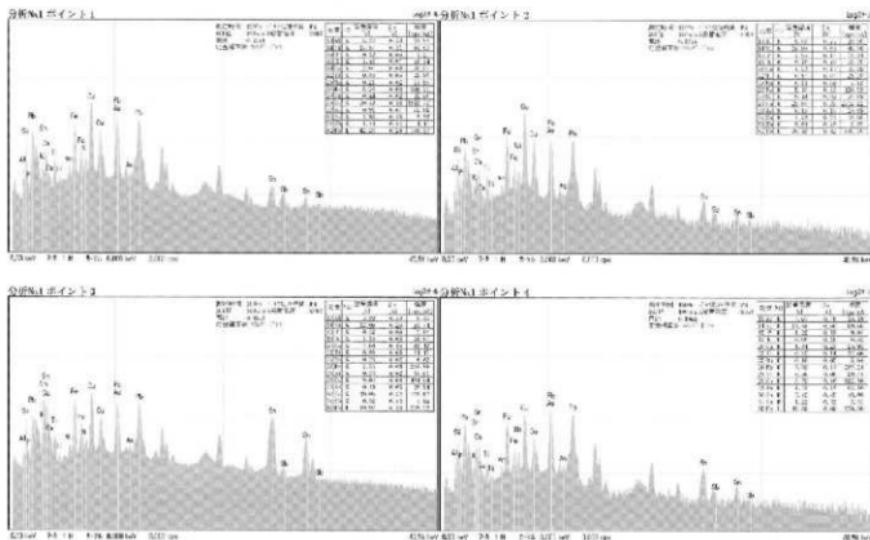


図5 ポイント分析スペクトル図(1)

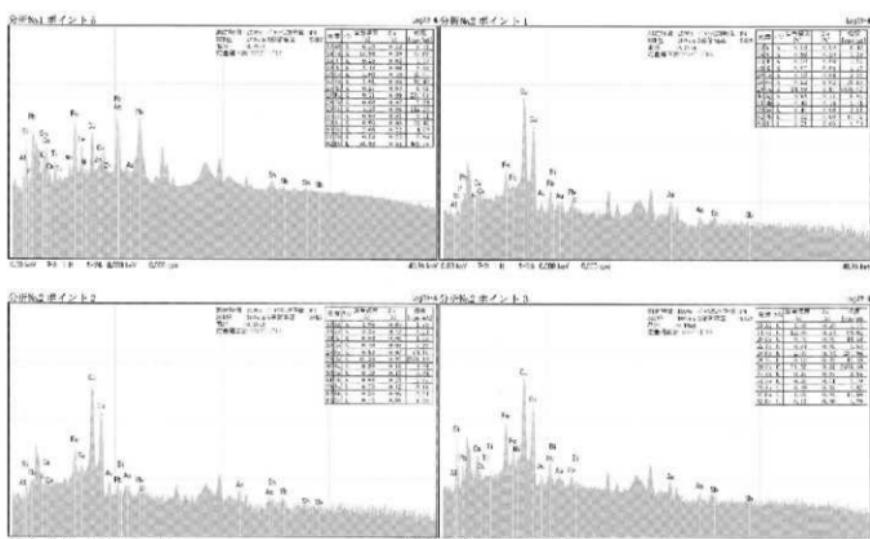


図6 ポイント分析スペクトル図(2)

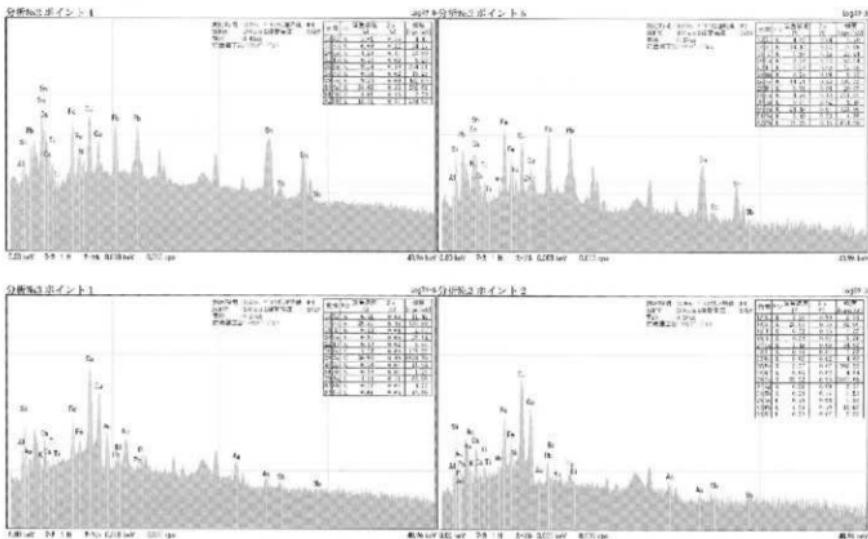


図7 ポイント分析スペクトル図(3)

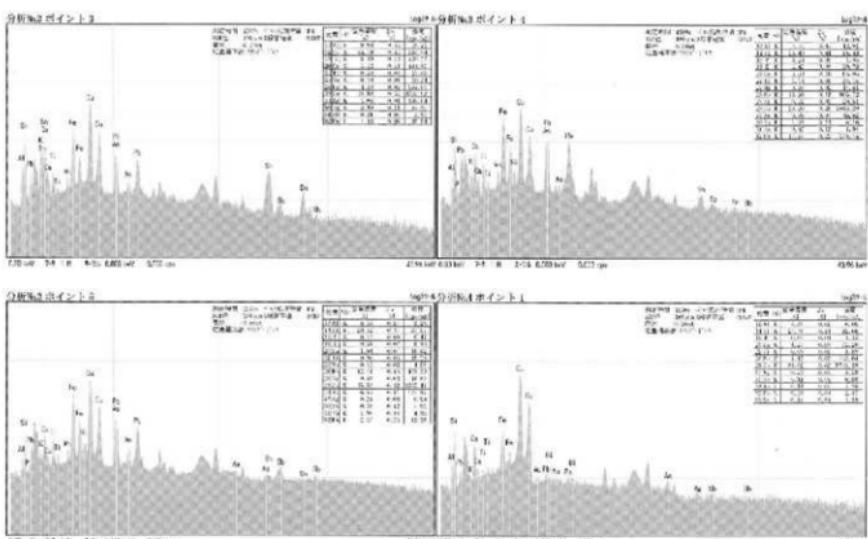


図8 ポイント分析スペクトル図(4)

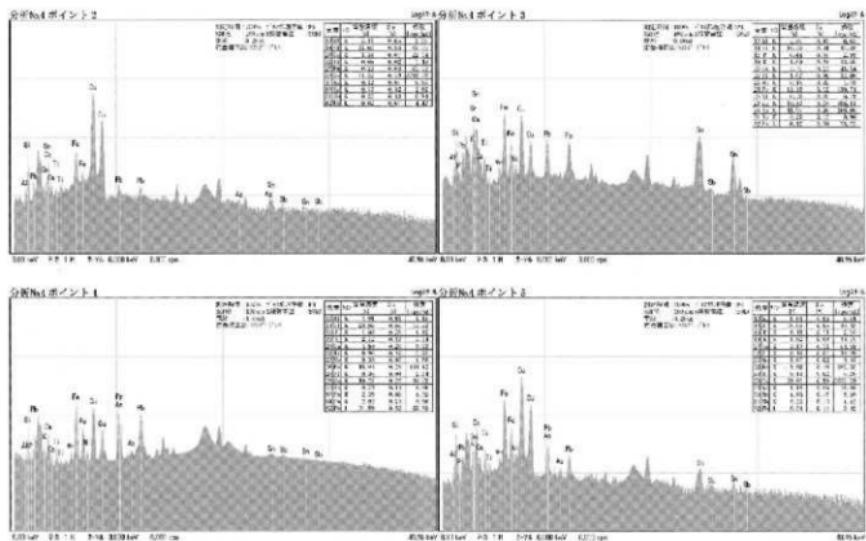
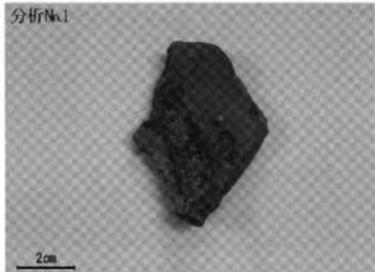
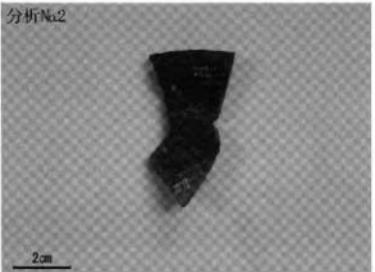


図9 ポイント分析スペクトル図(5)

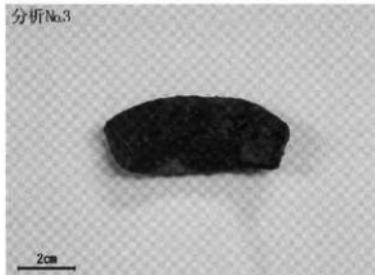
分析No.1



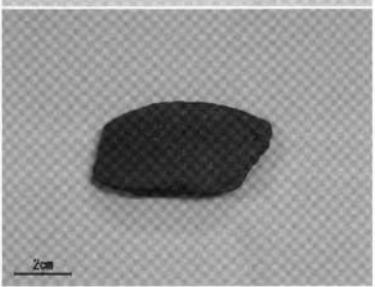
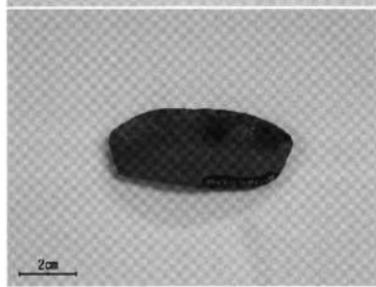
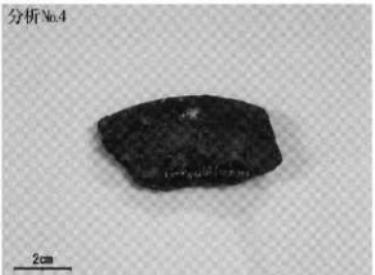
分析No.2



分析No.3



分析No.4



図版1 分析対象資料

第5章 考察

第1節 字三角の様相

躑躅ヶ崎の尾根筋に沿って南流する藤川と市道鍛冶小路に挟まれた三角形の地形を呈する字一角地区の主たる調査目的は、遺構の有無も含めて状況が不明であった大手東端部一帯の土地利用の形態や構造、性格の把握であった。そのため、調査トレンチは、幅2mで字三角全体を縦横断で確認できるよう設定した。

南北トレンチでは、東西トレンチとの交差点にあたるトレンチ7までは、比較的保存状態も良く、現状の小規模な区画内から戦国期の遺構・遺物が検出された。トレンチ7以南では地山の露出も目立ち、水田造成時に削平を受けた可能性が高いことが明らかになり、断面観察によって調査区北側では確認されなかった大規模な盛土による造成の痕跡も確認された。このことから、遺構密度が薄いトレンチ7以南であっても戦国期の段階で斜面北側の高所を切上し、南側へ盛土することで平坦面を確保した様相が見受けられたことは、土地利用の在り方を知る上で重要な発見であった。造成の状況から判断するかぎり、字一角南側一帯の旧地形は、北側に比べて傾斜が強かったものと考えられ、平坦な屋敷地の形成には大規模な造成が不可欠であったようだ。

この結果から戦国期には字三角全域に開発が及んでいたことが確認されるとともに、区画については、トレンチ間の残存状況や、遺構の連続性を考慮すると、字三角全体の縦横断調査によって戦国期に既存の地割りの原形がある程度形成されていた可能性が高いことが明らかになった。

しかしながら、個々のトレンチの様相を比較すると、水田層直下でも包含層が残存する遺構密度の高い場所と、水田層直下で地山が検出される遺構密度の低い場所に分かれる状況が浮き彫りになった。その傾向はトレンチ7とトレンチ8で顕著にみられ、トレンチ7では溝跡や土坑、ピットなどの遺構が確認されているが、一段低い区画に位置するトレンチ8では礫が露出する地山面のみが検出されており、区画の段差を挟んだ両者の様相は大きく分かれた。

それに類似した状況として、同じ水田跡の区画内で異なる様相が検出されたトレンチ5のような事例もある。トレンチ5では、トレンチ中央の2号溝跡を境に北側では水田層直下で礫層が露出する地山面上で遺構が検出され、もう一方の南側では包含層が残存し、遺構・遺物が良好な状態で出土する状況が確認されている。北側では土坑が4基連続して検出されたものの、南側に存在したような包含層はなく、明らかに南北の様相は異なっていた。

以上のようなトレンチ間やトレンチ内における遺構・遺物の検出状況の偏在は、戦国期の屋敷地割りがある程度踏襲されつつも、水田開発による造成段階で手が加えられたものである可能性が高いことを端的に示すものと考えられる。特にトレンチ5のような事例では、水田造成時に地形の高低差が比較的小ない小規模な区画同士は統合され、より大きな区画として造成された結果と理解できるのではないかだろうか。

また、字三角の地割りを考える上で、個々の区画をつなぐ道路の存在は土地利用を考える上で見逃すことができない。今回の調査によって、トレンチ4やトレンチ9・16・17の一部で確認された小礫の集石は、字三角内の屋敷地をつなぐ道路跡の一部である可能性が高いと考えられ、トレンチ16・17などは、現代まで水田の畦道として継続した利用がなされたとみられる。

検出された遺構や地籍図上の区画も参考に字三角内の道路網を推定すると、調査区西側の鍛冶小路に併行するような軸線となるトレンチ16・17で検出された南北方向の道路跡を基軸とするとみられる。そのほかにも、トレンチ15東端部で検出された石列なども南北方向の道路境界の可能性があり、藤川際にも河川に沿った細い道路が存在したと考えると、南北方向には大きく2条の道路が復元さ

れる。

東西方向についても、トレンチ4を設定した細長い区画やトレンチ9南端部で検出されたような道路が接続していたと考えられ、全体的に各敷地を結ぶ道路網が整備されていたのではないかと考えられる。したがって、字三角一帯の道路網は、図1に示したような形で既存の鍛冶小路や字一角南側の東西道路のほかにも、様々な規模の道路が接続したのではないかと推測された。

試掘調査のもう一つの目的である字一角の性格に関しては、調査区全体から熔融物付着土器の出土が特徴として挙げられる。固化できなかったものも含めて、熔融物付着土器は、主にトレンチ2・3、トレンチ12・14付近に集中的に出土している。金属製品の様相をみても、同じような状況であることから、鍛冶関連遺物にまとまりがある区画に関しては、鍛冶職人が居住していた可能性がある。

同様にトレンチ5では確認はないものの、埋甕の抜き取りと思われる連続する4基の土坑が検出されている。貯蔵に関わる施設も何らかの職種に関わる遺構である可能性も考えられ、字三角の性格は、小規模な区画群が連続する利用形態と出土遺物から推察するかぎり、職人などが居住した城下町域であると考えられる。

第2節 字高堀の様相

字高堀は、武田氏館跡東側一帯に残された字名であるが、惣堀と総称している堀に伴う土塁を指した名称と考えられ、今回の調査した場所は、字三角から市道鍛冶小路を挟んだ北西側に近接している。古い地籍図などでは長方形の区画が連続した地割りが確認される一帯であり、扇状地の地形に合わせて雑壇状に造成されていた姿が窺える。

調査段階では、トレンチ1～3とトレンチ4・5の間はコンクリート擁壁によって約0.8mの段差が形成されていたが、発掘調査の結果、両区画の造構面の高低差は、実際には約0.3m程度の段差であり、基本的に低い段差で区分切られた区画であったことが確認された。反対に現状では同じ敷地内に設定されていたトレンチ4・5間では、造構面に約0.6～0.7mの段差が生じていることから、戦国期には別の区画であったことが判明し、地形の段差による小規模な区画が連続していた状況を確認することができた。この結果から、地籍図に残る形態が比較的戦国期の区画を反映しているとみられ、字高堀一帯は、字一角同様に小規模な区画群が連続する屋敷地が展開していたと考えられる。

そうした区画のあり方を考える上で、出土遺物の様相が参考となるが、この地点で特徴的な遺物としては、字一角で散見された熔融物付着土器の存在である。特にトレンチ5内では多数の熔融物付着土器が出土するとともに、焼土に覆われた1号土坑の存在も考慮すると、この場所で鍛冶が営まれていた可能性もある。熔融物付着土器は、トレンチ2からも出土していることから、連続した屋敷地であるのか、独立した2区画の屋敷地であるかは現時点では判断はできないものの、少なくともこの地点の居住者としては、鍛冶職人の可能性が高いと考えられる。

字高堀地区的調査では、敷地の構造や形態、その性格を把握することのほかに惣堀北側の立ち上がりを把握し、その位置と規模を確認することも目的の一つであった。特に大手東側の惣堀のうち、北虎口部に開削されていた地元で「川堀」と呼ばれている溜池は、貞享3年（1686）の『古府中城下絵図』には「四方堀」と記載されていることから、武田氏館廃絶から比較的早い時期に周辺地域の農業用水の確保を目的に開削されたと考えられ、戦国期の堀の範囲や形状が復元できるかが焦点であった。

発掘調査ではトレンチ2・3の南端部では惣堀の北側の立ち上がりが既存の護岸石積みの内側で検出され、土層観察からも戦国期に開削されたことが改めて確認された。堀跡のラインについても護岸石積みによって整備された時点で規模を小さくしたことが明らかにされたものの、概ね戦国期のラインを踏襲していることが判明した。特にトレンチ3で堀の北端が検出されたことによって、溜池とし

ての用堀が堀の西・南側を中心とし土星部分まで大きく切り崩して開削されたものであったことが明らかにされた。

また、用堀の上流部に開削されていた別の溜池については、トレンチ1西端部の調査状況では惣堀の立ち上がりは確認されず、遺構確認面は急激に断ち切られたような状況が確認された。貞享の絵図にも確認されないことを考慮すると、比較的新しい時期に開削された溜池と考えられ、惣堀自体はトレンチ2・3の検出ラインを延長する位置でV字形を形成していた可能性が高いと断定した。溜池の開削によって堀跡の線形が消滅したことが改めて確認されたことにより、今後の整備事業の中でどのような形で惣堀の復元を行うかが大きな課題となった。

参考文献

- 飯沼賢司 1985 「戦国期の都市“甲府”」『甲府市史研究』第2号 甲府市市史編纂委員会
数野雅彦 1990 「中世城下町甲府の立地と都市プラン」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』
第3号 帝京大学山梨文化財研究所
甲府市教育委員会 2000 『史跡武田氏館跡VI』
甲府市教育委員会 2002 『史跡武田氏館跡IX』
甲府市教育委員会 2003 『史跡武田氏館跡X』
甲府市教育委員会 2009 『史跡武田氏館跡XIV』
甲府市教育委員会 2009 『武田城下町遺跡III』

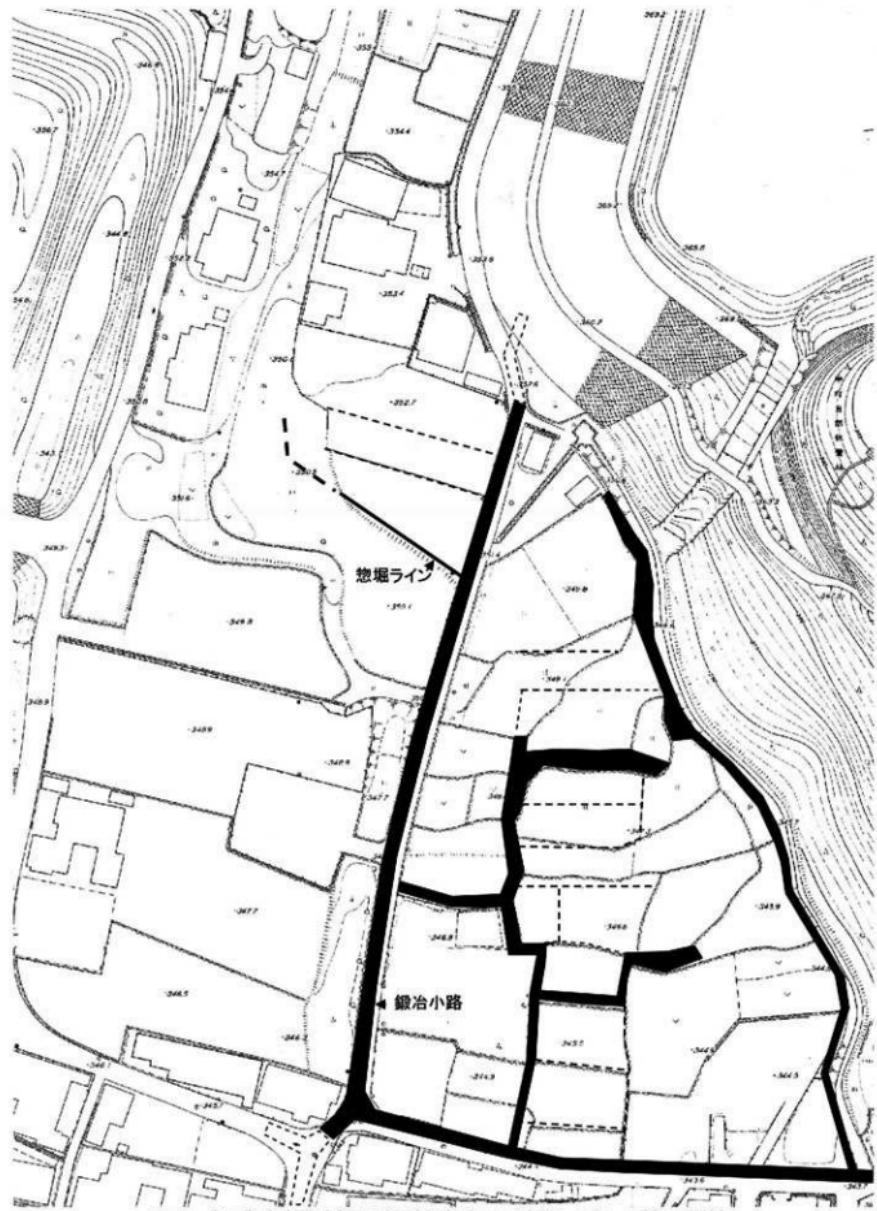


図1 字三角字高堀地割及び道路網想定図（破線：地割、黒塗：道路）

第6章 結語

史跡武田氏館跡第1期整備事業（大手門周辺ゾーン）の中でも大手東側の外郭線と考えられる惣堀のさらに外側に位置する字三角・字高塚地区の試掘調査について報告してきた。両地区的土地利用形態については、大部分が近年まで水田として耕作されていたが、発掘調査によって、水田造成層直下に戦国時代の遺構・遺物が埋蔵されていることが確認された。その成果については第5章で検討したとおり、両地区ともに連続する小規模な屋敷区画群が戦国時代には形成されており、その区画を利用する形で水田造成などが行われてきたことが明らかにされた。このことは、調査目的の一つに挙げられた地下の保存状態や土地利用の変遷を知る上で大きな成果であった。

また、武田氏館跡における両地区的役割を考える上で、鍛冶関連の遺物である熔融物付着土器が多数出土したことは、この一帯の居住者像を考える上で極めて重要な手掛かりである。両調査地点の間には、戦国期からの古道とされる市道鍛冶小路線が現在も南北に貫いている。この道路は、武田氏館を中心に城下町内に設定されたと考えられる南北方向の5本の基軸となる街路のうち東から2番目の道路であり、戦国期にはちょうど大手東側周辺で鍛冶小路、あるいは古籠屋小路と呼ばれていたようである。字三角南側には字鍛冶小路が所在し、武田城下町遺跡の調査では、金山神社北側の区画から多数の熔融物付着土器が出土していることから、鍛冶職人の工房が想定されている。周辺部の様相も踏まえた上で字三角・字高塚の性格を考えると、鍛冶職人の居住区を含む職人街が展開していた可能性が極めて高く、地形に合わせた小規模な雑居状の区画が並ぶ城下町域ではないかと考えられる。

字高塚については、一部は宅地化によって区画造成がなされていたが、発掘調査の結果、宅地造成以前の旧耕作土直下において戦国期の生活面とともに、惣堀の北側の立ち上がりが検出された。江戸期以降に灌漑用水として惣堀の利用と改修が図られ、2箇所の溜池が開削されているが、そのうち、古絵図等にも記載されていない溜池については、近現代になって字高塚の区画の一部を切り崩して開削したことが明らかになった。

以上の調査成果を踏まえ、史跡武田氏館跡字三角・字高塚の様相を総括すると、館の東側一帯には鍛冶職人らが居住する城下町が展開していたと結論づけられ、出土遺物からも年代的には武田期に最盛期を迎えていたことが明らかとなった。惣堀に関しても、溜池の開削や堀幅等の変更はあったものの、既存の堀ラインは概ね戦国期から踏襲されていることが確認され、復元整備をする上での貴重な情報を得ることができた。

平成16年度に策定された基本構想・基本計画の段階では、戦国期の字三角・字高塚地区の区画や詳細な様相が不明であったこともあり、基本的にはある程度現状の地形を残しつつ、全体的には緑地整備とする計画が示された。

しかし、調査の結果、織豊期に形成された惣堀・土塁によって区画された曲輪状の空間の様相とは異なり、16世紀中葉から後半にかけて成立した城下町城であったことが確認されたことを受けて、改めて整備方針も含めた整備基本計画の抜本的な見直しの必要に迫られることとなった。整備計画の見直しについては大きな課題であるが、城下町の整備方法に関しては、特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡のような立体復元など先行事例もあり、今後、史跡武田氏館跡保存整備委員会等にも諮りながら、取り扱いを協議することとし、本書を結ぶこととする。

字三角・字高塙の発掘調査・出土遺物写真



武田氏館跡遠景



武田氏館跡近景



字三角俯瞰（西から）



字三角俯瞰（北から）



字三角全景（垂直）



字高堀俯瞰（南から）



字高堀調査区全景



字三角調査前



調査開始直後



調査状況



遺構確認状況



トレンチ1 全景



トレンチ1 Pit1 内土器出土状況



トレンチ2・3 全景



トレンチ4・5 全景



トレンチ 4・5 全景



トレンチ 5 全景



トレンチ 5 北側土坑群



トレンチ 5-1号土坑断面



トレンチ 5 南側1号溝跡



トレンチ 5 遺物出土状況



トレンチ 6・7 全景



トレンチ 7 全景



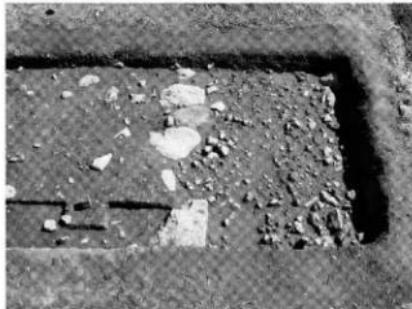
トレンチ 8・9 全景



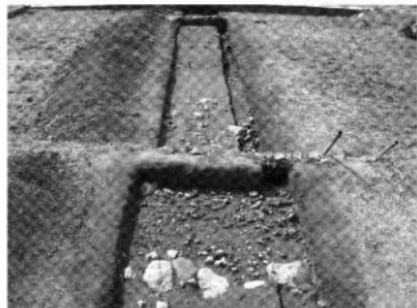
トレンチ 8 全景



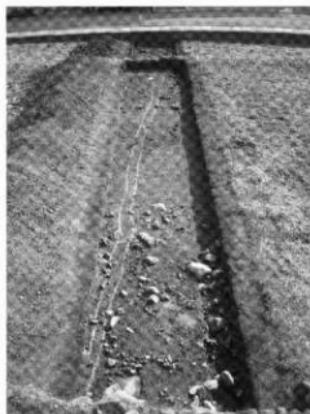
トレンチ 9 全景



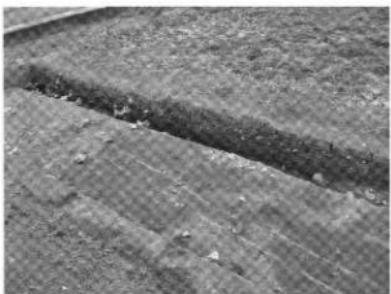
トレンチ 9 南側 集石



トレンチ 9 南側・10 全景



トレンチ 10 全景



トレンチ 10 南側断面



トレンチ 12 全景



トレンチ 13・14 全景



トレンチ 11 全景



トレンチ 12・13 西側全景



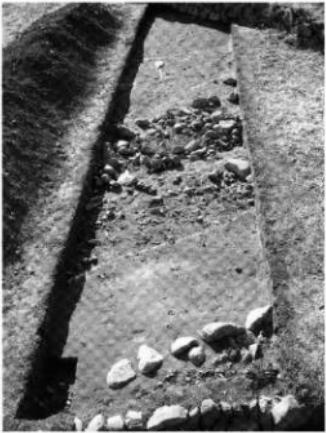
トレンチ 13 東側 Pit 群



トレンチ 13 東側 Pit 列



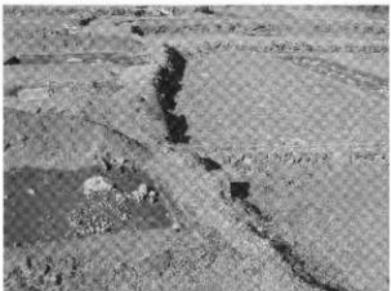
トレンチ 14 北壁断面



トレンチ 15 全景



トレンチ 15 溝跡



トレンチ 16・17 全景



トレンチ 15 東端部石列



トレンチ 16 全景



トレンチ 17 全景



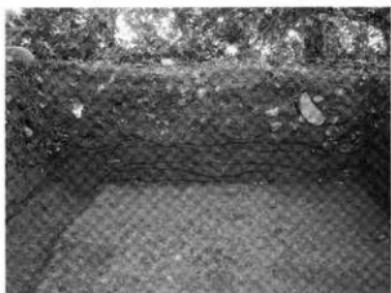
字高堺調査前



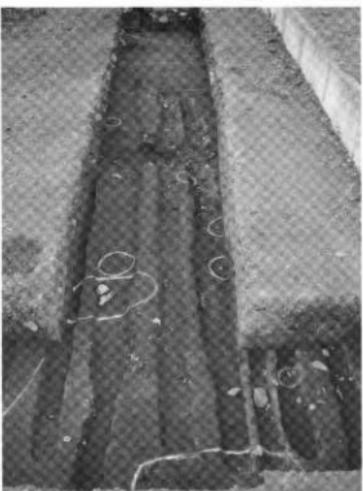
字高堺調査状況



トレンチ 1・2 煙畝跡



トレンチ 2 南壁断面



トレンチ 1 遺構確認状況



トレンチ 2 遺構確認状況



トレンチ 2 物堀跡西壁断面



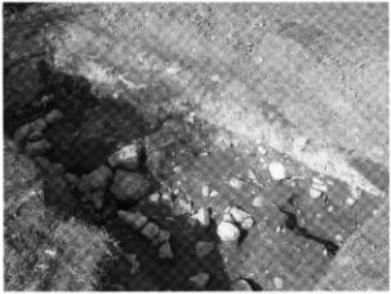
トレンチ 3 全景



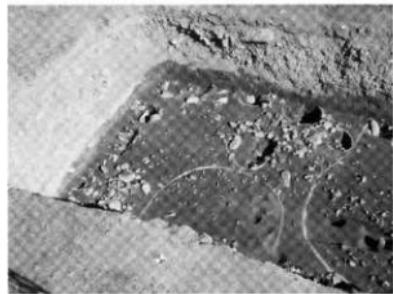
トレンチ 3 懸堀跡西壁断面



トレンチ 4 全景



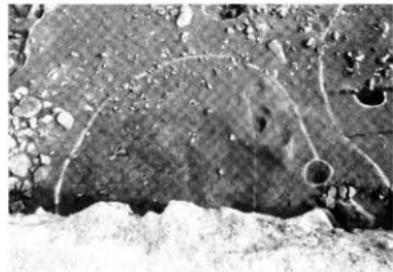
トレンチ 4 北壁断面



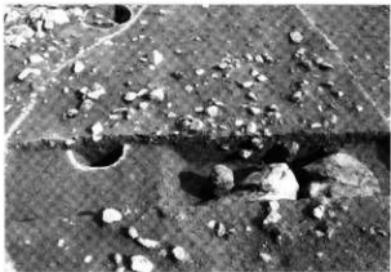
トレンチ 5 北側全景



トレンチ 5 南側全景



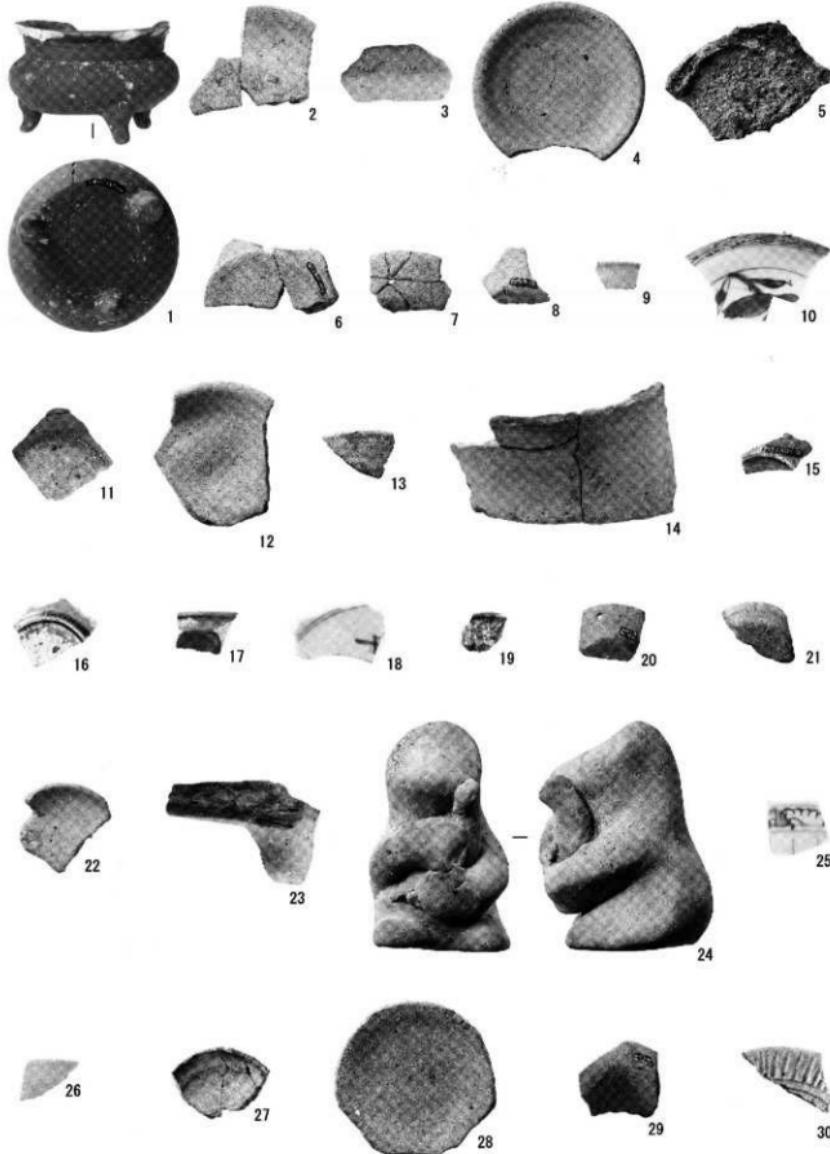
トレンチ 5 1号土坑

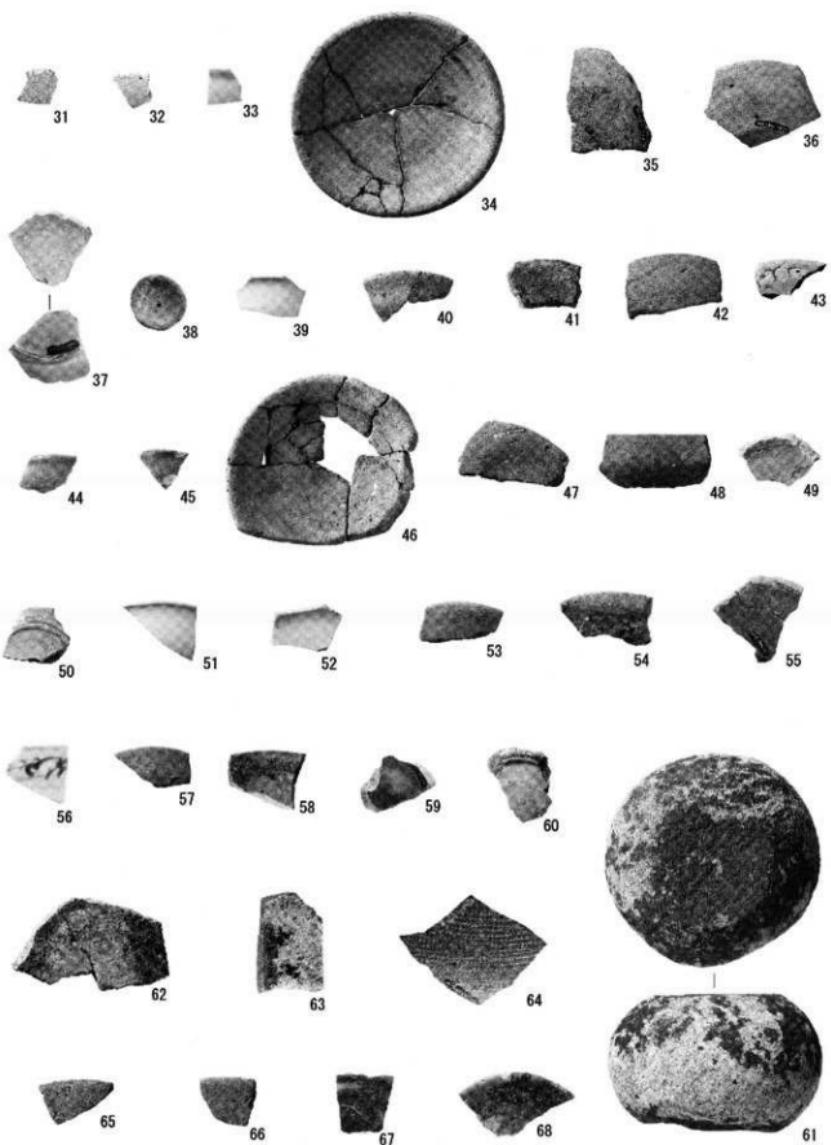


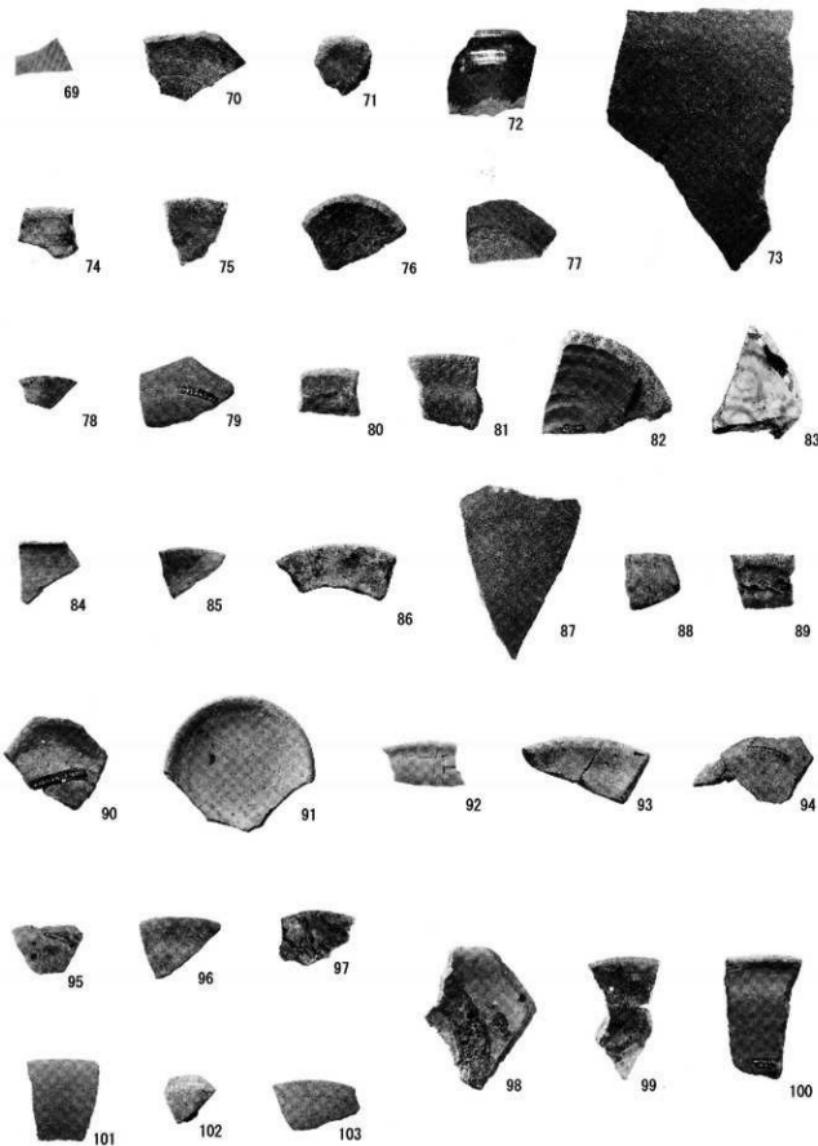
トレンチ 5 1号溝跡・Pit13断面



トレンチ5全景









104



105



106



107



108



109



110



111



112



113



114



115



116



117

報告書抄録

ふりがな	しせきたけだしやかたあと						
書名	史跡武田氏館跡XIII						
副書名	史跡武田氏館跡第1期整備事業（大手門周辺ゾーン）に伴う字三角・字高幡試掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	甲府市文化財調査報告書						
シリーズ番号	47						
編集機関	甲府市教育委員会						
所在地	〒400-8585 山梨県甲府市丸の内一丁目 18番1号 電話 055 (223) 7324						
発行年月日	平成22年3月26日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査原因
所収遺跡名	市町村	遺跡番号	。	。	。	。	。
武田氏館跡	山梨県甲府市 古府中町・墨形 三丁目・大手 三丁目	19201	57	35° 40' 14"	138° 33' 20"	20061016 ~ 20070330	史跡環境整備に伴う試掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
武田氏館跡	城館	中世	溝跡・柱穴列・土坑・柱穴		かわらけ・土器壺 鉢・内耳土器・火鉢・陶磁器・古錢・釘・石臼・五輪塔		

甲府市文化財調査報告 47

武田氏館跡 XIII

— 史跡武田氏館跡第1期整備事業(大手門周辺ゾーン)に伴う字三角・字高幡試掘調査報告書 —

平成22年3月26日

発行 甲府市教育委員会

〒400-8585 山梨県甲府市丸の内一丁目18番1号

TEL 055 (223) 7324

FAX 055 (226) 4889

印刷 輝内田印刷所

〒400-0032 山梨県甲府市中央二丁目10-18



甲府市教育委員会

